旅日記

山菜歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
旅日記

【Ｎコード】
Ｎ０８１９Ｈ

【作者名】
山菜歩

【あらすじ】
私は歩。旅が趣味の人間である。旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。そんな旅の記録である・・・。

P．01～○月×日　ヨーロッパ某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

私は、ヨーロッパ某所の砂浜を歩いていた。
海風がとても心地いい。
私は潮の香りのする空気を思いっきり吸い込んだ。
山で育った私にとって、青い海は癒しだ。
空を滑るように飛んでいくかもめを目で追っていると、
一組の老夫婦がこちらに向かって歩いて来るのを、視界の端に捕らえた。

何十年という長い年月を寄り添って歩いてきたのだろう。
手を繋ぎ、ゆっくりと歩いている。
老紳士は背が高く、ステッキをついて歩いている。
老婦人は優しげな瞳に、少々クセのかかった白髪を後ろでまとめている。
共に上品な服装と雰囲気を纏った、素敵なご夫婦。
私は素直にそう感じた。
ふたりは時々見つめあって、微笑みあって。
私達も、あんな夫婦になれたらな・・・。
普段は置いてけぼりにしてしまう恋人のことを思い、さすがの私も

少しだけ老夫婦のことを羨ましく感じた。

ふと、爆音が鳴り響き、地面に影がよぎった。
老夫婦は空を見上げる。つられて私も空を見上げた。
どうやら複葉機が横切って行ったようだった。
また老夫婦は見つめあい、苦笑している。
外国語がさっぱりな私には、何を話しているのかはわからないが・・・。

物書きの端くれでもある私は、空想癖がある。
ふたりの仲むつまじい様子、複葉機を見たときのふたりの様子。
下衆の勘繰りかもしれないが、このふたつをキーワードにして、この2人の生い立ちを想像してみることにした・・・。

―＊―

きっとふたりは幼馴染なんだろう。
日が暮れるまで、泥だらけになって遊んだり。
野いちごの実を採って、「こんなに採ったんだよ！」って見せあいっこしたり。
ふたりにとっては大きな砂山を一生懸命作ったり。
海辺で紙飛行機を飛ばしたり。
彼女の帽子が風にあおられて飛んでいったら、彼が慌てて取りに行って。
彼の顔に泥がついていたら、彼女がハンカチで拭いてあげて。

小さい頃から、何をするにもいつも一緒。
本当に仲良しなふたりだったんだろう。

でも、時代はふたりにとって恵まれたものではなかった。

戦火の真っ只中。

ふたりが遊んだ野原の緑は、戦車のキャタピラに掘り起こされ。
ふたりの住む街は、爆弾で火の海になり。
ふたりが作った砂山は、砲弾に飛ばされ・・・。
ふたりが飛ばした紙飛行機は、軍用ジープに踏み潰され・・・。

戦闘機が飛んでくる度に、ふたりは遊びを中断して避難しなければならなかった。
世の中の事情を知らないふたりは不満に思いながらも、限りある時間の中で一緒に過ごしたのだろう。
だが、戦争は激化し・・・
ふたりは分厚いコンクリートの壁に隔たれ、離れ離れになった。
瓦礫からは、ふたりの写真がおさまった、ひび割れた写真立てが残された。

コンクリートの壁が壊され、また何年か経って・・・。
ふたりは再会した。
それはあまりにも偶然に。そして唐突に。
でもそれは必然の再会で。
成長したふたりが恋に落ちるのは、時間の問題だった。
恋に落ちてから、永遠に結ばれるまでの間に何があったかは・・・
空想癖のある私にも想像できない。
ただ、色んなことがあったのだろう。
いいこともあれば、悪いこともあったと思う。
その一つ一つを乗り越えるたびに、ふたりの絆は幼い頃よりももっと強くなって・・・。
それは永遠に結ばれてからも一緒で、何十年の時が経って・・・。

―＊―

つま先に何かが当たった感触で、私は我に帰った。
足元に目を落とすと、紙飛行機が刺さるようにして落ちている。
私はそれを拾い、海に向かって飛ばした。
紙飛行機は風に乗り、水平線の向こうまで飛んでいきそうな勢いだ。

そして、すれ違った老夫婦を見やる。
老婦人が目をこすっている。どうやら砂が目に入ったようだ。
それを心配そうに、老紳士が彼女を覗き込んで頬に手を添えた。
外国語がさっぱりな私には何を言っているのかわからなかったけど・・・。

（大丈夫かい？）
（ええ、すみません。大丈夫ですよ。あなた。）

何となくそう言っているような気がした。

潮が満ちてきたのか、波打ち際が近くなってきてる。
また、誰かが作ったのであろう砂の山は、高くなってきた波に飲まれて崩れ去った。

”たとえふたりが作ったものが壊れてしまったとしても
ふたりの絆は誰にも壊せない”

我ながら恥ずかしいセリフを思いついた。
そんな自分に苦笑しながら、私はトランクを担ぎ直した。

ふと老夫婦と目が合った。
老夫婦が私に会釈をした。
私も彼らに会釈を返す。
そしてきびすを返し、ふたりとひとりは別の方向へと歩き出した。

fin・・・

P．02～△月○日　日本某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊
―＊―＊―＊―＊―

そんな旅の途中。
私はある国の蚤の市で腕時計型のラジオを手に入れた。
性能は、そこらのラジオに負けていない。
ラジオフリークの彼へのお土産にしようと思う・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊
―＊―＊―＊―＊―

私はある街を訪れた。
その街には、ある都市伝説があるという。

夏の日の夕方。
ＦＭのチャンネルを廻していると、気まぐれに受信する音楽番組があるという。
大規模なカーニバルが行われる事で有名な国の曲ばかりをチョイス。
時折、その国にまつわる豆知識を披露する。

ＤＪはマリアという若い女。
発信源もわからない。
番組名もない。
人々は「南国の幽霊番組」と噂するようになったという・・・。

その街のホテルにて。
私はトランクを部屋に放り投げると、自身の身体もベッドに投げ出した。
うー。何日ぶりのふかふかのベッドだろう。ここの所、ずっと野宿だったもんなぁ。
枕に顔を埋めただけで、疲れがドッと出てきてしまう。
いけないいけない。
無理やり身体をベッドから引き剥がし、服の洗濯と自分自身を洗濯しに向かった・・・。

たっぷり３０００は数えるくらいにバスダブを満喫し、茹でダコ状態の自分を冷房全開で冷ましながら、ふと私は腕時計型のラジオを手に取った。

竜頭型のチューナーをいじり、聴き慣れた番組が裏蓋のスピーカーから流れてくる。
西日が部屋を照らし、白い壁に私の影を落とす。
「・・・・・・・・」
私は闇雲に、チューナーをいじってみた。
番組・・・ノイズ・・・番組・・・ノイズ・・・
何度繰り返しただろうか。

それは唐突だった。

ザザ・・・・・Ａｈ～♪・・・・・ザザザ・・・

南国の、曲。

私はハッとし、チューナーの目盛りを確かめた。

日本の放送局にはありえない数字だった。

私は更に細かくチューニングをあわせる。

ザザザザ・・・・・・で、・・・・・でした。今日もビーチから見える夕日がキレイね。私のいた国の夕焼けも、とてもキレイで・・・

たぶん、これだ。「南国の幽霊番組」は。

私は確信した。

ビーチ・・・。

私がいる街も、海辺の街・・・。

そんな都合のいい事があるわけ・・・ないないっ。

私は頭を横に振ると、ベッドに座った体勢のまま横に倒れた。

しばらく相棒のトランクを見つめていたが、いつの間にか南国の音楽がメリーさんの大群を呼び・・・。

きっと、南国のヒツジさんは、頭に羽根飾りをつけてサンバのリズムに乗って現れるんだろうなぁ・・・。

くだらないことを考えながら、食事をすることも忘れて私は眠ってしまった。

・・・夜中、冷房の寒さで目を覚ましたときには、ラジオからはノイズしか流れていなかった事は言うまでもない。

翌日。

都合のいい事が起こってしまった。

夕方だというのにあまりの暑さに参ってしまい、日陰でトランクを椅子代わりにしてその場に座り込み、私は一気に水を飲み干した。
憎たらしいほどに、西日がきつい。サングラスを買っておかなかったことを激しく後悔した。
一息ついて、また私は歩き出す。

すると

微かに声と音楽が聞こえてきた。
南国の曲、若い女の声・・・。記憶を探る。
昨日ラジオで聞いたばかり。
周りを見渡すと、砂浜に一軒家がぽつり。
私は砂浜に降りた。

さくさくと砂を踏みしめながら、一軒家に辿りつく。
広々としたテラスに、様々な放送機器。
室内には大量のレコード。

ここだ。
「南国の幽霊番組」の本拠地は。

「今日も暑かったね～。夏の日の夕暮れ、いかがお過ごしでしょうか？ＤＪマリアです」
ヘッドホンを片手に、マイクに向かってひたすら話す。
話しベタな私には羨ましい限りのトーク術だ。
後ろでは、男の子がパタパタと彼女のサポートに立ち回っている。

ふと、彼女と目が合った。
私は立ち去ろうとしたが、彼女は「待って！」とジェスチャーをする。私は足を止めた。
「では今日の1曲目、お聞き下さい」
マイクのボリュームを下げると、彼女は私に手招きをした・・・。

「びっくりしました。ここに人が来るなんて・・・」
栗色の長い髪をいじりながら、彼女は言った。
私もとってもびっくりしました。昨日聴いたばかりの声の主に会えるなんて。
私と彼女は笑いあった。そんな女2人の様子を、男の子がそっと覗いている。

彼女曰く、男の「子」と言っても童顔なだけで、れっきとした成人男性。
「どうしてもここで働きたい」と駄々をこねられ、それ以来手伝ってもらっている「優秀なアシスタント」とのことだ。
「彼」は小柄でくりくりとした黒い双眸。
誉められたのが嬉しかったのか、頬を赤く染めているのが何とも可愛らしい。
何だか、子犬みたい・・・
私はそう思った。
ラジオ放送の真っ最中なので、彼女との会話は途切れ途切れだったけど、おおよその事情がわかった。

彼女はとにかくおしゃべりが大好きと言うこと。
自分の生まれた国のことをもっと知ってほしいと言うこと。
自分の生まれた国の音楽をもっと知ってほしいと言うこと。

ラジオ放送を始めた動機は、それだけだという。
私は幻のラジオ公開生放送を、しばし堪能することにした・・・。

「番組の終わりの時間が近づいてきました。今日最後の1曲。・・・
マリアの我侭を聞いてください」
彼女はマイクに向かってそう言った。
「私、好きな人がいるんです。どうしても気持ち伝えたいけど、う
まく言えなくて」

ぱさ

後ろで微かにだけど音がした。
「彼」がレコードを落とした音だった。
一瞬だけど、表情が見えた。

衝撃、落胆、絶望。
そんな色が垣間見える表情だった。
そうか、彼は・・・。

私は彼女を睨みつけた。
だが、彼女は無視してトークを続ける。
「私の好きな人、いつもマリアをフォローしてくれる頼もしいパー
トナーなの。
でも、好きになっちゃったら、このラジオ、続けられなくなっちゃ
うんじゃないかって思って。
この番組が続けられたのは、彼が色々サポートしてくれたから・・・
。

男性として見ちゃって、パートナーとして見れなくなっちゃうのが私怖くて・・・」

打って変わって。

彼、目まん丸。顔真っ赤。
私も目まん丸。

「それでも私、彼のこと好きだから・・・。自分を勇気付ける為にこの曲流します」
彼女の流した曲は、有名なラブソングだった。
「サキさん・・・」
私は彼の声を、背中越しに聞いた。
既に砂浜に足を下ろしていた。

え？何でって？
・・・だって、お邪魔したら悪いでしょ？
私だって、そんなヤボなことはしたくありません。

ああもう。
何だか無性に彼に会いたくなった。
せっかく故郷（くに）に帰ってきたんだし・・・。
・・・腕時計型のラジオと、このエピソードをお土産に、このまま彼の家に突撃することにしましょうか♪
私はトランクを担ぎなおし、砂浜をさくさくと歩いていった・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

その街には、ある都市伝説があるという。

夏の日の夕方。
ＦＭのチャンネルを廻していると、気まぐれに受信する音楽番組があるという。
大規模なカーニバルが行われる事で有名な国の曲ばかりをチョイス。

時折、その国にまつわる豆知識を披露する。

発信源もわからない。
番組名もない。

でも、ＤＪはマリアと言う若い女ひとりから、ふたりに増えたという・・・。

ｆｉｎ・・・

P．０２～△月○日　日本某所にて～（後書き）

旅日記第２弾。

私は自称・ラジオフリークです。
職場でＦＭヨコハマが流れていて、いつの間にかラジオ好きになっていたと言うか・・・。
ＮＯＥＶＩＲ　ＳＡ＆ａｍｐ；Ｕａｃｕｔｅ；ＤＥ！　ＳＡＵＤＡＤＥ（Ｊ－ＷＡＶＥより放送）が大好きで、そのテーマに沿ったのと・・・。
あと、歩の考えとをミックスさせた結果、こんなお話ができちゃいました。

自分の思っている事・知っている事を、大勢の人に知って欲しい。

こう思っている人って、たくさんいると思うんです。
歩もその一人で、「ブログ」「小説」という形で出しています。
それだけじゃなくて、ある人はエッセイや小説だったり、またある人は写真や絵で表現したり・・・。
無線をやっている友人がいますが、
「もっと規模を大きくしたいよなぁ」
そう思って、そして歩の大好きな「ＦＭ放送」に的を絞りました。

一応登場人物にも設定はございまして・・・。

ＤＪマリア
ハーフという設定にしているので「マリア」と「サキ（咲）」の２つ名前があります。
「彼」が最後の方に「サキ」と呼んだのは、そういう理由です。

日系3世。
おしゃべりが大好きで、母国の事をもっと知って欲しいと思っている、愛国心の強い女性。
「ラジオ」という手段を通し、自分の趣味も兼ねて番組を放送しています。

マリア側の「彼」
ちゃんと名前は考えてありますが・・・あえて出しませんでした。
たまたま聴いたマリアの放送に聴き惚れて、彼女のアシスタントに志願。
彼女が断り続けても3日3晩軒下に居座り、彼女が根負けしたという逸話も持っていたりします。
言葉少なで照れ屋。マリアの事が大好きな青年。

＊尚、マリアがやっていることは、現実世界では「海賊放送」という立派な違法行為に当たりますので、よい子はマネしないでください。

P．０３回想：～☆月△日　ヨーロッパ某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

「南国の幽霊番組」の後、私は本当に彼の家に突撃したのだった。
アポなしの突然の私の来訪に彼は驚きつつも、温かく迎え入れてくれた。

お土産の腕時計型のラジオを手渡す。
案の定、珍しい物好きであり、ラジオ好きの彼は喜んでくれた。
そして私は旅の土産話をする。
そんな土産話の中の一つである・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

ヨーロッパ某所の島国でのことである。

私はトランクを担ぎ、のんびりと歩いていた。
ここの所ずっと海辺を歩いていたので、緑がとても美しく感じる。
空気もとても新鮮・・・なような気がする。

トランクを降ろし、公園のベンチにどっかりと座って背伸びした時だった。

「さぁさぁ！ジョン爺の人形劇の始まり始まり〜！！」

・・・今時珍しい。

私の故郷(くに)で廃れてしまった文化が外国で未だに残っていることに、私は素直に感激した。
からからと鳴るベルの音に、子供達が集まってくる。
「ねぇねぇジョン爺。今日は何のお話をしてくれるの？」
子供の一人が、目をきらきらと輝かせながら訊いた。
きっと彼は子供達の人気者なのだろう。
「今日は妖精のお話だよ。・・・あぁ、そこの旅人さんもどうだい？いい土産話になるよ」
私に話を振ってきたよ。
・・・面白そうだし、見てみようかな？
「よぉ〜し。クリック？」
「「「クラック！！」」」
「人形劇の始まり始まり〜！！」
どうやら故郷(くに)の紙芝居屋とは違って、お金は取らないらしい。
アコーディオンを鳴らしながら、人形劇が始まった・・・。

―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―
主人公は冒険好きのひとりの少年。
ある日、少年は森に遊びに行った。
そこは昔から「妖精が出るから、子供は遊びに行ってはいけない」

と言われている森だった。

曰く、妖精に魅入られた子供は、彼らに引き込まれてしまう。
曰く、妖精に気に入られたら、一生森から出てこられない。

「そんなわけあるか」
少年は忠告を鼻で笑い飛ばし、その森に入っていった。

その森は誰も入ってこないから当然手付かずで、ふわふわとした苔の上に寝転び、少年はそのまま眠ってしまった。

しゃらさら
しゃらしゃら

微かな物音に少年は目を覚まし、目を見張った。
大人の手の平くらいの大きさの人間が、空を飛んでいる。
背中には、羽根。
その姿は、何度も絵本で見た。
妖精だ・・・
少年はそう思った。

妖精の一人が少年に近づき、七色にきらきらと輝く花を少年に差し出した。
妖精達は、少年の来訪を心から歓迎しているようだった。
楽器を取り出して、小さな音楽会を開いてくれたり。
少年の周りでくるくると踊ったり。

少年は楽しいひと時をそこで過ごしたのだった・・・。

少年が「帰らなきゃ」と思ったのは、それから7時間後のことだっ

た。
妖精達は引き止めたが、少年はそれを振り払って森を出た。
辺りには少年の見たことのない風景が広がっていた。
一体どういうことなのか？
少年は通りかかった街人に訊ねた。
「何を言ってるんだい？今は西暦××年だよ？」
妖精達と過ごした時間は、確か7時間だったはず。
なのに、何で７０年も経っているの？
・・・・・・・・・・・・・・・
実は妖精達の世界では、１時間は人間にとって１０年に相当すること。
少年は図書室で読んだ本の内容を思い出した。
少年は時の流れにおいてけぼりにされてしまったのだった。
―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪―♪
―♪―♪―♪―♪―♪―
・・・何と言うか、後味悪いなぁ・・・・。
私の素直な感想だった。
似たような話が故郷にもあるが、まだそっちの方が救われている。
だって、帰ってきた後、時代の流れに（強制的に）対応してるし・・・。
「一瞬の楽しいことに目を奪われると、後々大変なことになっちゃうよ？わかったかな？」

「「「はぁ～い！」」」
は・・・はぁ～い・・・。
私もつられて手を挙げたのだった。
・・・私も、楽しそうなことにはすぐ飛びつくし、ハザードウェイな生き方してるもんなぁ・・・。

翌日

私は「泉の森」と呼ばれる森に足を運んだ。
何でも森の中央部にある湖の景色がとても素晴らしいとの事だ。
地元の人に是非と言われて、私は足を運ぶことにした。
心地よい、緑の匂いを孕んだそよ風。
・・・何だか森林浴にハマる人の気持ちがわかる気がする。

でも、残念なことに、だんだん雲行きが怪しくなってきた。
山の天気は崩れやすいし、もしかしたら一雨来るか？

と思った瞬間。

轟音と共に、バケツをひっくり返したような雨が地上に降り注いだ。
ぎゃあああああっ！
私は雷が大嫌いな人間である。

私は散歩道を外れ、森の中に入っていった。
やれやれ、雨がやむまで少し休むか。
トランクから雨具を取り出そうとして、視界の端に何かが映った。
・・・羽根？
私は顔を上げた。

何もいない。
私は再びトランクに目を向ける。
しゃらさら
しゃらしゃら
微かな物音が私の耳に響いた。
再び顔を上げる。
いつの間にやら。
大人の手の平くらいの大きさの人間が、空を飛んでいる。
背中には、羽根。
その姿は、何度も絵本で見た・・・ことがある。
・・・・・は??
あまりの事態に、私は声を失う。
これって・・・まさか・・・。
よ、妖精・・・デスカ?

私のあっけに取られた顔を見て、妖精達はケラケラとおかしそうに笑っている。
そしてするりと私から離れると、くるくると踊りだした。
周りの妖精も、楽器を取り出して演奏を始める。
彼らの楽器は、とても繊細でキレイな音色を奏でる。
きっと私たちには出せない音だろう。
独特の旋律、独特のリズム、独特の節回し・・・。

・・・何か、もっと聴いていたいなぁ・・・。

元々民族色の強い音楽が好きな私だ。
今まで聴いたことのない音楽に、私はすぐに虜になった。
気のせいか、少し眠くなってきたような・・・。
頭にぼんやりと霞がかかったような感じになった。

しばらく妖精たちの演奏会と舞踏会を堪能していると・・・。

一人の妖精が、私に花を差し出した。
七色にきらきらと輝く、小さな花。
私は受け取ろうとして

一瞬手が止まった。

昨日の人形劇。
妖精たちに魅入られると・・・どうナっチャうンだっケ？

私は霞がかった頭を強引に働かせてすぐに結論に思い至り、手を引っ込めた。

そして妖精たちにこう言った。

ごめんね。
私には帰る所があるし、帰りを待っていてくれる人達がいるの。
だから私、このお花は受け取れない。あなた達とも遊べないの。
でも、歓迎してくれてありがとう。

通じたのかどうかはわからないけど、花を差し出した妖精はがっか

りしたような、残念そうな表情を浮かべた。
妖精達は一斉に音楽を奏でる。
私は強烈な睡魔に襲われ・・・。

木の葉から垂れた水滴で目を覚ましたのだった。
周りを見渡しても、森が広がるばかり。
雨はいつの間にか上がっていた。

起き上がってまず目に入った物は。
びしょ濡れになったトランクの中身・・・。
私は思わず嘆きの声を上げた。

そして。
荷物を漁っていて気づいたのだが、後で食べようと思っていたチョコレートの缶がなくなっていた事を追記しておく。

―＊―

「・・・それ、歩の夢だったんじゃないのか？」
彼は笑いながら私に言った。
夢じゃないもん。ホントに見たんだもん。
下手したら一生会えなくなってたかもしれない、えまーじぇんしーな事態だったんだぞ？
彼は笑う。
「これが本当の『フェアリーテール』。なーんてね」
何それ？
「『おとぎ話』ってこと」
誰がうまいこと言えと言った。

くっ・・・証拠写真があれば・・・！

前の国で、簡易カメラを買っておかなかったことを、ここに来て初めて後悔した。

言い返せない変わりに。

私は彼に目掛けてクッションを投げつけたのだった。

ｆｉｎ・・・

P．03回想：～☆月△日　ヨーロッパ某所にて～（後書き）

旅日記第３弾。

今回の舞台は森。ファンタジー風味で書きました。

このお話は「妖精伝説」と「コティングリー妖精事件」が元ネタになっています。

ジョン爺の人形劇＞＞

１：「妖精伝説」と、童話「浦島太郎」をミックスさせた、とんでもないお話になってしまいました。（本物の妖精伝説は、もっと残酷なお話です）

２：ジョン爺と子供達の間でやり取りした言葉。

「クリック？　クラック！！」

これは、お話の語り部が「お話しますよ？（クリック？）」と観客に確認を取り、観客が「いいですよ！（クラック！！）」と返す、お約束のやり取りです。

・・・何か、駄文中の駄文かも・・・？

グダグダな展開になってしまったのも、ひとえに筆者の筆力不足です、はい。

もう酷評覚悟です。はい。

少しずつ勉強していきますです。はい。

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

Ｐ．０４：～旅の途中で～（前書き）

少しネガティブ風味有り。
苦手な方は閲覧注意願います。

P．０４：～旅の途中で～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

旅に出るときに、彼に必ずやるやりとり。

「今度はどこまで行くんだ？」
”うーん。・・・行ける所までかなぁ？”

「必ず帰ってきてくれるか？」

いつも彼はこう聞いてくる。

”当然。どうしたの？”

「時々不安になるんだ」

”何が？”

「歩が旅に出るたびに、二度と帰ってこないんじゃないかって・・・」

”・・・・・・・・・・・・・”

「なあ、答えてくれよ。帰ってきてくれるよな？」

私は不安そうな彼の顔を見る。

―＊―

私は実は、何度かこのままいなくなってしまおうと考えた事があった。

家族、友達、そして恋人全て捨てて、本当にこの世の果てまで歩いていって・・・。

終着駅も決めていた。

それは・・・壮大な岩々が連なる峡谷。

彼の方が先に見て、私に写真を送ってくれた。

それは私も見てみたかった景色だった。

彼が見た同じ景色を、一度でいいから見て、

そして、その後は。

私はまだ、その選択肢は捨てずにいる。

―＊―

でも、私は笑顔で

”何言ってるの。ちゃんと帰ってきますって”

”お土産もたくさん買ってくるし、土産話だってたくさんしますから”

彼はほっとした顔になった。

「わかった。楽しみにしてるよ。いってらっしゃい」

と、笑顔で送り出したくれた。

さて、今度はどこに行こうか。

そろそろ桜のシーズンだよなぁ。

どこか桜のキレイなところに行こうか。

私はトランクを担ぎなおし、見送ってくれている彼に大きく手を振った。

ｆｉｎ．．．

P．０４：～旅の途中で～（後書き）

旅日記シリーズ～旅の途中で～、また書くことが出来ました＾＾

今回は、ちょっと私の暗黒面に触れてますが・・・。気分を害しちゃったらゴメンナサイ。

＊歩が見たかった景色
「グランドキャニオン」の事です。
ある人曰く、その場に佇み、景観に圧倒されて、その場で涙する人もいるとか。
「自分って何てちっぽけな存在なんだろう」「何て壮大な景観なんだろう」と思うようです。
とても感動的な風景なんでしょうね。

そこで夕日と星空を見てみたいと思っている歩でした。

・・・念のため書いておきますが、ちゃんと帰ってきますからね？

P．05：　～△月×日　日本某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―
彼の家から出て、早３日。

私は日本を南下していた。
トンネルを抜けた先に見えた、素晴らしい桜並木。
もうそんな季節かぁ・・・。
私は車掌さんに詳しい場所を聞き、次の駅で降りることにしたのだった・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

緩い坂道をひたすら登る。
頭上には桜のトンネル。日本でしか味わえない風景。
近くに学校があるようで、チャイムの音が聞こえた。
間を置かず、制服姿の女の子達がすれ違う形で坂を下ってくる。
まだ制服に「着せられている」感じ。新入生なんだろう。
不安いっぱい、期待いっぱい。
そんな心情なんだろうなぁ。

私は遠い昔の事を思い出した。
あれからウン年かぁ・・・。
私は思わずため息をついた。
思い出すんじゃなかった・・・。

坂を上った先は、開けた野原になっていた。
そこに大きな桜の木が一株。
その木の下に、一人の青年が佇んでいた。

”こんにちは”
私は声をかける。
青年は不機嫌そうな顔をこちらに向けてきた。
「・・・どうも」
不機嫌そうな目が私のトランクを捉える。
「おねーさん、旅人？」
”そうだよ”
「日本中旅してるんだ」
”日本どころじゃないよ。世界中だよ”
「マジっすか！？すげぇ！」
不機嫌そうな表情が一変。
まだまだ幼さを残した、と言うよりも好奇心旺盛な子供そのものの表情に変わった。
”あなたはここで何をしているの？”
逆に私が質問する。
「あ。俺、ある人を待ってるんです」
”ある人？”
「友達。またここで会おうって約束してて・・・」
”ほうほう”

彼によると・・・。
彼の友達は年上で、学生時代に出会った。
お互い複雑な家庭環境に育ったふたりは、お互いに励ましあいながら学生時代を過ごした。
バカな事をしたり、お互いに愚痴りあったり。
ケンカをすることもあったけど、それでもずっと仲良くしてきて。

「卒業する時に、『また来年の今日、ここで会おう』って約束したんです」
”ほほぅ。ロマンチックですなぁ。男同士の友情ですか”
「友情」という単語を出した時、彼の表情が曇った。
「でも、来ないんですよ。連絡も取れなくなっちゃって」
彼はその場にしゃがみこむ。
「もう、5年ですよ？」
”あなたは毎年ここに来てるんだ”
「うん。でも、あいつ来ないんだ・・・」
”うーん・・・。でもさ、何か都合があったのかもしれないじゃん”
「うん。俺もそう思いたい」
”でもって、まだ午前中でしょ”
「うん」
”もう少し、待ってみようよ。暇つぶしには付き合いますよ？”
「・・・じゃあ、旅の話を聞かせて」
”ＯＫ！”
私はトランクに腰かけ、旅先でのエピソードを話し始めた。
彼は興味深そうに、旅の話を聞いてくれたのだった・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

夕方。
「・・・結局来なかったなぁ」
まだ日が暮れるまで時間はあるよ。
「・・・いつも、こんな感じなんです」
彼はうつむいた。徐々に湿っぽくなってくる。
「俺、勘違いしてたのかな・・・」
何を？
「俺が一方的に友達だって思っていて、向こうはそう思ってなくって・・・。俺、勘違いしていたのかな・・・？」
”どうしてそう思うの？”
「俺、ずっと友達がいなかったんです。だから、そいつが声をかけてきてくれたとき、ホントに嬉しくて・・・。ただ一人で舞い上がってただけなのかな。俺、バカみてぇ・・・」
だんだん嗚咽混じりの声になり、彼は泣き出してしまった。
”友達同士でも、すれ違う事だってあると思うよ？人間だもん。完璧なんてありえないでしょ？
逆にあなたが友達の立場だったら、どう思う？”
「・・・・・・・・」
彼は答えない。きっといろんなことが頭の中を巡っていて混乱しているのだろう。
”私だったら、すごく焦るよ。
連絡が取れなくなっちゃって、居場所もわからない。
大事な友達と会える唯一の場所で、唯一ののチャンスなんだもん。
このチャンスは逃したくないって。私だったらすごく気が焦る。”
普段だったら絶対に答えは言わないけど。私なりの答えを彼に言っ

た。

「じゃあ、何でっ・・・？」
私を睨みつけた瞳が見開かれる。
私は彼の視線を追った。

一人の男性が、息を切らしながら立っていた。
彼がきっと「友達」なんだろう。

「よかった、間に合った・・・」
「・・・っ！」
彼はの瞳からは、とめどなく涙が溢れ出す。

「バカぁ！俺の事、忘れちゃったのかと思ったよぉ・・・」
「忘れるわけねぇだろうが、アホ。ごめんなぁ。ずっと連絡せんで・・・」
「友達」曰く、家庭の事情からうかつに連絡を取ることが出来なくなっていたとの事。
号泣する彼の頭を、友達はわしわしと撫でる。

彼らは友達以上だ。

「心友」「信友」

そういう言葉があってもいいんじゃないかって、誰かが言ってたっけ。

彼らにはその言葉が当てはまるんじゃないかな？

私はそう思った。

袖で涙を拭きながら、彼が私に振り向いた。

「旅人さんの言うとおりだった。待っててよかった・・・。ホントにありがとう・・・」

”私は何にもしていませんよ。

あなたが友達を信じてここで待っていた。

友達も彼がここにいるって信じていて足を運んだ。

単なる、必然の出来事なんですよ？”

それだけ言うと、私はトランクを担ぎなおした。

「もう行くの？」

”もちろん”

「また会える？」

”・・・気が向いたらね。またここに来ますよ”

私はニコリと笑い、そのままふたりを顧みずに坂を下った。

「あの人、誰？」

「俺の『友達』」

その言葉、しかと心に受け止めましたよ。

来年の今日。

私はここに来よう。そう心に決めたのだった。

ｆｉｎ・・・

P．05：　～△月×日　日本某所にて～（後書き）

旅日記シリーズ第５弾。

今回は「友達」をキーワードにして書いてみました。

最近、友達って何だろう？って考える機会がありました。

＊友達
親しく交わっている人。（広辞苑より）

＊親友
信頼のできる親しい友。仲のよい友人（広辞苑より）

こうやって言葉を並べてみると簡単なようなんですけれど・・・実はとっても難しい。
歩自身、この歳になるまで「友達」というものがどういうものなのかわかりませんでした。
色々考えることはあったけど、結局理屈じゃないんだなぁって。
言葉抜きでも分かり合える、許しあえる人達が、私には出来ました。
それは共通の趣味を持つ人達であったり、同じ職場の仲間であったり。

本当に「その人」と分かり合いたいのなら、傷つくのを恐れずにぶつかっていくのも一つの手なのではないかな？と、アグレッシブな歩は思うのでした。
（もっと器用なやり方を知っている方！歩に教えてください・・・）

＊登場人物設定

彼

「友達」を待つ青年。

転校を繰り返していた為、友人が出来ずにいた。

その時に「友達」と出会い、他人と触れ合う事を知る。

友達

「彼」の友達。

一応留年生という設定があったりします。

だから「彼」より年上。

最後の方にしか出てこなかったけど、気さくでユーモアセンスあふれる面白い人。

行方をくらませないといけないほど危険な状態にありながらも、「彼」と再会したいという思いを持ち続けた、心根の強い人だったりします。

次の舞台はどこにしようかな？

旅行代理店の前に立ち止まる機会が増えた歩でした。

P．０６　回想：～☆月△日　ヨーロッパ某所にて・追記～（前書き）

６月１６日に、一部修正しております。

P．06　回想：～☆月△日　ヨーロッパ某所にて・追記～

妖精達に惑わされそうになった「泉の森」。

空港に向かう列車の中で手記をまとめていた時の事。
以前訪れた「泉の森」近辺に住んでいる子供達から聞いた、ジョン爺の話し以外にももうひとつ噂があったことをふと思い出した。

「『泉の森』の奥深くに、幽霊屋敷がある」
「幽霊屋敷には、スリーピースのスーツを着た男の幽霊が出るらしい」
「幽霊に捕まったらとり憑かれてしまい、二度と屋敷から出られなくなる」
等々・・・。

妙に具体的で曖昧な噂だった。

何故過去形かと言うと・・・。
実は私は、幽霊屋敷の側を通った事があった。

確かに、痛みかけた屋敷の壁には蔦が這いまわり、外壁の八割を覆っていて不気味な印象があった。

でも・・・。

花壇には色とりどりの花が植えてあって、温室にも緑鮮やかな観用植物が茂っている。

そして何より・・・。

一組の男女がベンチに腰かけ、楽しそうに談笑していた。

・・・はて？

「男性」って点はＯＫ。

確かにスリーピースのスーツを着ている。

補足するのなら、ワインレッドのリボンタイを締めている事だろうか。

でも、足があるし影もある。

・・・立派な人間さんではありませんか？

それはそれとして。

ひとり増えてない？

ダークグリーンのドレスを身に纏い、長い金髪を結い上げた女性が男性の隣にいる。

噂とは全然違う事に、私は驚いた。

それとも、幽霊さん（人間さん？）の事情が変わったのかな？

どうでもいいけど。

女性が私に気づき、微笑みかけてきた。

男性は私に気づいていないようだ。

私は女性の幽霊さんに会釈を返すと、そのまま踵を返した。
お邪魔したら、悪そうだったし・・・。
もちろん、真相をばらす気なんて毛頭ない。

世の中、知らない方がいい事がある方がいいもんね。

「アンジェラさん？どうされましたか？」
「いいえ。そこの木にリスがいたものですから・・・」

ふたりの声を、私は背中越しに聞いた。

ちょっと得したような、ちょっと残念なような気持ちになった事は内緒だ・・・。

ｆｉｎ．．．

P．06　回想：～☆月△日　ヨーロッパ某所にて・追記～（後書き）

回想～☆月△日　ヨーロッパ某所にて・追記～
最後までお読み頂き、ありがとうございました。

実はこのお話は、私の執筆した他作品「近くて、遠くで・・・」の後書きの最後の方に出したなぞなぞの答えであり、「近くて、遠くで・・・」とリンクしています。
そして、「近くて、遠くで・・・」の「彼女」の名前も出しました。

＊アンジェラ
「彼女」の名前です。
由来としては「アンジェラス（Ａｎｇｅｌｕｓ）」が基になっています。
意味としては、キリスト教用語で「お告げの祈り」もしくは、お祈りをする時間を告げる「お告げの鐘」という意味でも使用されます。

歩が「泉の森」を探索していて、ふたりの住む家をたまたま見つけてしまった。と言うわけです。

超常現象や未解決ミステリー等を解明しようとする番組や著書がありますが、本当にごく一部の物（特にミステリー関係）に関しては「謎のままにしておいた方がステキなんじゃないかなぁ？」と歩は思っています。

そんな考えもあったので、即興で書かせて頂きました。

歩の旅は、まだまだ続きます。

P．07：～×月◎日　中国某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

久しぶりの外国だ。

ホテルで過ごしていたとき、いきなりドアが開いた。
男3人が足音もなく部屋に入ってくる。
私はとっさに警棒型スタンガンを取り出した。
青白い火花をスパークさせたとき、男は慌てた素振りを見せた。
彼らの話を要約すると。
「あなたを襲いに来た訳じゃない、『城主』が外の国の話を聞きたがっている」とのこと。
私は眉をひそめる。

”ナゼ私がここにいるってピンポイントでわかったの・・・？”

男の話によると、この辺りの区画は「城主」の管轄らしい。
旅行者の入出国の管理もされているとの事だった。
城主は、近くの安宿に泊まった旅人にとても興味を持ったと。しかも女性で。

”え？私はここの辺りはごはんが美味しいからって勧められたんですけど・・・。
実際美味しかったですし”

「は？・・・それがここに来た動機・・・？ですか？」

私、頷く。
男、固まる。

曰く。
ここはとても治安が悪く、普通の旅行者なら近づかない所だとの事。
ここまで来て。
ようやく己の身の危険を感じ、身体中に冷や汗をかいたのだった・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

念の為スタンガンを構えながら男達に着いていくと。
すえた悪臭、澱んだ空気・・・。
ここ、めっちゃスラム街じゃん。
顔を上げれば、どう考えても違法としか思えない高さのビル郡が密集し、アンダーグラウンド的な城のように聳えている。
城主はそこにいるのだろう。
ここはいわゆる、一つの負の王国なんだ。

通りを埋め尽くすバラック小屋。
配水管の修理が行き届かないためか、汚水避けのシートが頭上でぼぼぼぼっと音を立てている。
あまり陽が差さず、とても暗い。
案内人曰わく「国の法律も届かない無法地帯」とのこと。
・・・て言うか、めちゃめちゃおピンクな看板があからさまに出ていたり、露店でいかにも「人間やめますか？」的な粉末やパイプが売られていたりしてたら、イヤでも気づきますってばぁ！

うん。私の認識間違ってなかった。
めっちゃ怖いです。はい。

私はへっぴり腰で、男達のあとを付いて行ったのだった・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

ビル群の最上階・・・と思いきや、地階に「城主」はいた。
私は目を丸くする。

ビロード張りの玉座めいた一人掛けのソファーに、足を組んで座っていたのは女性だったからだ。
彼女は明らかに私より年下。
下手したら少女と言ってもいいかもしれない。
彼女には名が無く、「アノニマス」と名乗っていると言う。
漂っている雰囲気と言うか、オーラと言うか・・・。カリスマ性がある。

足元には靴底が沈み込むような質も品もいい絨毯が敷かれている。

まさしく「謁見の間」。
旅の土産話と各国の写真ポストカード引き換えに、謁見する事を許された。
彼女はポストカードをとても喜び、私とふたりで話したいと人を払った。

「峡谷に、海辺の街、水の都・・・。あなたは色々なところを見てきているのね」
”あはは・・・放浪癖は昔からあるので・・・”

彼女曰く・・・。
生まれたときからここに住んでいてここから出ることもできず、外の国にも行くことができなかった。
住民からは「城主」と呼ばれているが、そんなの肩書きだけでしかない。
私は、「一人の女の子」として自由に生きたかった。
と・・・。

「あなたは色々なことや物を見て触れている。私は井の中の蛙。自由なあなたが羨ましい」

”私は自由ではありません”

私はきっぱりと言い切った。

”本当に自由な人間なんて、誰もいません。
私だけでなく、色々な人が、大小問わず様々なしがらみに縛られて生きています。
極論を言ってしまえば、一番大きくて避ける事の出来ない「倫理」

（モラル）に”

”本当の「自由」を手に入れたいのなら、「倫理」を捨てなければ得ることはできません。
でも「倫理」を捨てちゃったら、人でなしになっちゃうでしょう？
「自由」って結構「不自由」なんですよ”

「・・・よく、わからない」
彼女はつぶやく。

私は微笑むと、更に続けた。

”それに私の母国には、「井の中の蛙」という言葉に続きがあるんです”

「？何ていうの？」

”井の中の蛙、大海を知らず”
”されど空の青きを知る”

「・・・・・・」

”確かにあなたは閉鎖的な環境で育ってきたと思います”
”でも、その中で暮らしてきたあなたにしか知りえない何かがあるはずですよ？”

「・・・そうね・・・」
つぶやくと、いきなり立ち上がり、私の手を引いた。
「見せたいものがあるの」
あっけに取られた私にそう言い、壁に手を這わせる。

目の前に、エレベータが設置されていた。
エレベータに乗り込んで操作盤をいじると、静かな音を立ててエレベータが動き出した。

およそ1分後。
「・・・私の、とっておきの場所です」
”うおおおおおぉぉぉ！？”

私が目にしていた景色は、普通では見られる物ではなかった。
違法建築を繰り返した結果、ありえない高さからの絶景。
ビル郡の隙間には、ロープを渡した洗濯物干しが国旗のように連なっている。
住民の、生活の匂いがする。
学校、老人ホーム、公園・・・。
外で遊ぶ子供達。

その土地の人達の生活が、見えるんだ！
ステキじゃないですかここ！

きいいいいいいいん！！

爆音に驚いてそちらを見ると・・・
すごい！飛行機があんなに大きい！空港が近い！！
無邪気に喜ぶ私を見て。
「さっきのあなたの言葉の意味って、こういうことなの？」

”そうです！すげええええぇぇ！！”

私は思わず喜びを含んだ雄叫びを上げたのだった。

その後。

彼女は食事会を開いてくれた。

旅の話を喜んで聞き、私は彼女の話を喜んで聞き・・・。

楽しい夕餉はあっという間に過ぎていき・・・。

宿までボディーガードつきで送って頂いたのだった・・・。

ボディーガード曰く

「城主が幼い頃から付いていましたが、あんなに楽しそうに笑う城主は初めて見ました」と。

感謝の言葉を私に言うと、ボディーガード達はスラム街に消えていった・・・。

怖い思いをしたけど、とてもいい「国」だったなぁ・・・。

月夜に聳える城を眺めながら、私は「城下町」で買ったほかほかの桃まんをほおばったのだった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

・・・後日。

風の噂によると、あのお城は取り壊されたと言う。

取り壊しの際、かなり大規模な反対デモ運動が行われたらしい。

壊されたあと、彼女らがどうなったのか、彼女が「自由」を手に入れられたのかは。

私にはわからない。

fin・・・

Ｐ．０７：～×月◎日　中国某所にて～（後書き）

＊城主の住む城
香港の、九龍城砦がモデルになっています。
現在は公園になっていますが、結構カルト的な意味で有名な場所でした。ここをモデルにした作品も沢山あります。
作品名を挙げるのであれば、攻殻機動隊とか、Ｇｅｔ　Ｂａｃｋｅｒｓとか・・・。
何か惹きつけられる魅力があるんでしょうね。

この旅日記シリーズは、歩の願望でもあります。
世界中、あちこちを見て回りたい。
その目で見て、感動してみたい。
そういう思いが込められています。
私自身も、城主と近い考え方は持っているかもしれませんね。

旅行代理店から、大量の冊子を頂いてきた歩でした。
店員さんの視線が痛かったです。

P．０８：～＊月＊日　エジプト某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

粘り気のある野菜のスープと豆のコロッケ、魚のバーベキューを堪能して幸せに浸りながら歩いていると・・・。

突然、「スフィンクス」と名乗る少年・少女５人に通り道を塞がれた。
話を聞いてみれば、少年少女のイタズラ好きギャング団のような感じだった。
ワルはする。でも盗みと薬はやらない。
極めて健全である。
４５度程生き方と考え方を変えて、逞しく生きていってほしいなぁ・・・。
ついついほほえましく思ってしまった。
そんな私の態度が癪に触ったのか、ムッとした表情で「スフィンクス」の少年のひとりが口を開いた。
「問題に答えられないと、通さないぞ」
「私達の問題は、難しいんだもん！」

少女の一人も口を開く。

ほほう。どんとこい。

私の首肯を合図に、彼らは問題を出してきた。
出してきたんだけど・・・。
ただ・・・その問題が・・・。

お約束の問題だったのだ。
最初は４本足、次は２本・・・ってやつである。

・・・キミタチ、遅れすぎです。
とっくの昔に。模範解答出とりますがな。
もうちょっと時代に対応しようよ。

思わずこめかみに指を当てた。
「どうだ！難しいだろ！」

得意げな笑みを浮かべた少年に私があっさりと正解を告げると、「スフィンクス」は唖然。
しぶしぶながら道を通してくれた。

おお。ここまでもあの伝説と一緒なのか・・・。

が。

私は、「ただのヒト」に自分を試される事をされるのが最っっっ

神様でもないただのヒトが、何様のつもりかと小一時間問い詰めたくなる程に。
しかも相手は子供。
大人の対応放棄。子供っぽさ全開。
腹が立ったので、私も「スフィンクス」に問題を出すことにした。
「『さんにんよればもんじゅのちえ』だもん！私達五人だもん！」
「無敵だもん！」
「俺達が知らないことは何もない。来やがれ！」
おお。難しい言葉知ってるな。
では遠慮なく。
”坂を登るときは三本足、下り坂では四本足。
これなあに？”
「スフィンクス」達は互いに顔を見せ合い・・・あっさり散り散りになったのだった。
完膚無きまでに叩きのめしたので気が済み、私はトランクを担ぎ直すと旅を再開した。
さて、四角錘の大きな墓でも見に行くか・・・。
ならとりあえず、水を買いに行こう。
―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

拝啓：「スフィンクス」さん達へ。

その後、お元気にしているでしょうか？
あの時の問題の答えですが・・・。

ごめんね。
さっきの問題、私にも答えはわからないの♪

敬具。

ｆｉｎ・・・

P．０８：～＊月＊日　エジプト某所にて～（後書き）

ちょっとギャグ風味（？）の旅日記をお送りしました。

元ネタは、スフィンクス伝説のお約束のなぞなぞと、アメリカンジョークを使わせて頂きました。

エジプトネタは、いつか一本書きたいと思っていました。

それと言うのも

私は

・世界遺産大好き。

・好きなアーティストの「姫神」が、ピラミッドの前でライブをやっていた（素晴らしい映像でした）。

・そして、エジプト神話大好き。

だからです。

決して某カードゲームで有名なマンガからではありません。

＊エジプト料理

実は一番の難題でした。

モロヘイヤスープ（粘り気のある野菜のスープの事）は知っていたけど・・・。

あと何があるの？

蔵書とネットサーフィンで、やっとこさ見つけました。

意外と肉料理もあるんだぁ・・・って感じです。
モロヘイヤが印象的だったんで・・・（苦笑）

＊「スフィンクス」の少年少女達
よく小学生が作る、ちょいワルグループみたいなモノだと思ってください。
男子３名・女子２名のグループ編成となっています。

＊歩が出した問題の答え
本当にわかりません。
誰か思いついた人。歩にご一報下さい。

（４月２８日に、解答を下さった猛者が現れました）

最後まで読んでいただいて、本当にありがとうございました。

P．09：～×月×日　ペルー某所にて～（前書き）

少々鬱展開気味です。
苦手な方は閲覧注意願います。

P．09：～×月×日　ペルー某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

危険度を完全に無視してこの国に入国していた私を、現地の人が驚きの表情で迎えてくれた。
何せ、紛争地帯という危険な場所である。
そして、私がここを訪れた理由を告げ、更に驚かれることとなった。

「人が乗る乗り物ではない」

そう言われる乗り物がこの地にあるらしいとの情報を手に入れ、私はここに足を運んだのだった。

普通なら、まっすぐに空港に向かえるのだが・・・。
時間はたくさんある。
モノズキな私は高山鉄道という「最凶」らしいの乗り物に乗ることにしたのだった。

だって。
高い山を登って、隣町まで行くなんてステキじゃない！
プラットフォームでトランクに腰掛けながら、私は鼻歌交じりで電車を待っていたのだった・・・。

実際乗車してみて。
・・・どこが、「人が乗る乗り物ではない」んだろう??
景色は荒涼としているけど、乗客もそこそこいるし、結構快適じゃん。

その時はまだ、そう思っていた。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

数十分くらい経った頃だろうか。

どさ。
どさどさ。

後ろから、重たい音がした。
荷物が落ちたのかな?と思って後ろを振り向いたら。

乗客3人が、倒れていた。

ひとりは顔面蒼白で、唸りながら頭を抱えている。
ひとりは、意識が混濁している。
ひとりは痙攣を起こしている。

・・・「人が乗る乗り物ではない」と言われた本当の意味を理解した瞬間だった。

高山病。

下手したら命を落としかねないぞこれ！！

炎熱地獄の列車には乗ったことはあるが、これは炎熱地獄以上の地獄だ。

携帯用の酸素ボンベを取り出し、私は口に当てて、新鮮な酸素を吸う。

動作確認の後、比較的軽症の人に酸素を吸わせた。

気休め程度にしかならないだろうが、ないよりマシだろう。

高山病の治療は低地に移動するしか方法はない。

あとの2人は・・・重症の状態だ。

即時に専門の集中治療が必要だ。

ここまで来ると、もう酸素ボンベは役に立たない。

私には、どうすることもできない。

車掌に状況を伝え、あとは間に合ってくれることを祈るばかりだ。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

幸い私は何ともなかった。

丈夫な身体でよかった・・・。

軽症の乗客は、低地に降りてしばらくしたら回復したようだった。

何を言っていたかはわからなかったが、握手を求められた。

感謝されているのだろうか？
私は握手に応じ、乗客にぎこちなく微笑んだのだった。

重症の乗客２人は、すぐに病院に搬送された。
私も救急車に乗り込もうとしたが・・・軽症の乗客が私を引きとめた。
乗客が首を横に振る。

私は歯軋りをしたが・・・頷いたのだった。
彼が言わんとした事が何となくわかったのだ。

私は彼に会釈をすると、悔しさを振り切って足早に空港へと向かったのだった・・・。

ｆｉｎ・・・

P．０９：～×月×日　ペルー某所にて～（後書き）

旅日記シリーズ第９弾。

最後までお読み頂き、ありがとうございます。

高山鉄道＞＞

ペルーの中央鉄道（カヤオ－ラ・オロヤ間）をイメージしています。
海抜４７８１メートルを走行するのだから、高山病のリスクも伴う、
まさに「最凶」の鉄道です。

自然の前には、人間って無力だよね。
友人と話した時にそんな話題になった事があり、書かせて頂いた次第です。

次回は少し、登場人物の視点が変わります。

ふたりめの旅人

僕はルイス。

僕の眼下には、ひたすら茶色い絶壁がそびえている。
見ているだけで、気分が荒んでくる。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊

僕の国は、いつも内戦が起こっていた。
いつ自分の命がなくなるか、怯えて暮らす日々を送っていた。
ある日。
住処も、父さんも、母さんも、姉さんも、友達も、みんな一度に失った。
爆弾テロだった。
「おつかいに行っていた」と言う理由で、僕だけが助かった。
みんな跡形もなく吹き飛ばされた。

僕は、僕の全てを奪ったこの国が嫌いだ。大嫌いだ。

絶望し、心を閉ざしかけていたそんなある日のこと、旅人がこの国を訪れた。

大きな革のトランクを担いだ女の人。
短い髪にバンダナを巻き、日焼けした浅黒い肌。
一瞬男の人かと思った。
危険だと言われている、高山鉄道に乗りたいがために、この地を訪れたらしい。

「だって、面白そうじゃない」

それが動機だとか。
何か、変な人。
でも、ちょっとだけ、お話してみたいと思った。
旅人は＊＊＊＊＊と名乗った。

何から話そうかと迷っていたが・・・・。

「どうしたの君？目が死んでるぞ？？」

実にストレートな質問だった。

いいチャンスだ。
住処も、父さんも、母さんも、姉さんも、友達も、みんな失ったことも。
この国が嫌いと言うことも。
全て話した。

「ふぅん。で、君はどうしたいの？」
相槌を打っていた旅人が、僕に聞いた。

え？

「君はこの国が嫌い。この国が嫌いなら、さて君はどうするの？」

ぼくは、どうしたいのかな？

「自分に正直に答えてごらん」
・・・・・・・・・・・・・・・

ここから出ていきたい。

「じゃあ、そうしようよ」

でも！
何が起こるかわからない。
悪いことが起こるかもしれない。
死んじゃうかもしれない。

「うん。そうかもね」

そうかもねって・・・！？旅人さんは怖くないの？

「もちろん怖いよ？でも私ならさ、起きるのかすらわからない不安に押しつぶされるより、今出来ることを考えるかなぁ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

何で？
「ん？」
何で旅人さんはそこまでして旅をするの？
しばらく間をおき、旅人さんはトランクを持ち上げて立ち上がった。

「私はね」

旅人は続ける。

「私は後悔したくないだけなの」

・・・・・・・・

「『ああ、あの時あれを見ておけば良かった』『こうすればよかった』って、悔しい思いをしたくないだけ。私のギリギリの生き方は根底にそういう考えを持っているからね・・・。バカみたいな動機でしょ？」

この言葉は、後に僕が旅に出ようと決めた、決定打となった一言だ。

そう言うと、旅人さんは去っていった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

僕はルイス。
旅の相棒は、いない。
この身一つで、旅をする。

”あとは君自身が決めなさい。
君がどうしたいのか。
そうしたいのなら、どうしていくのか・・・”

今さっきまであった国境線は爆撃で吹き飛び、兵士たちはその攻撃と対応でてんてこ舞いになっていると、旅人から聞いた。

”その選択が間違いだと言われても、
君が納得できたのなら、
それはそれで正しかったと胸を張って言えるでしょう？”

”君の好きなように生きなよ”

どこまで行けるかわからないけど・・・。
この選択が正しいって胸を張って言えるくらいに、強くなりたい。
旅人さんの言葉を胸に、僕は壊れた国境線を越え、新天地へと最初の一歩を踏み出した。

ふたりめの旅人（後書き）

旅日記シリーズ第１０弾。「ふたりめの旅人」
最後までお読み頂き、ありがとうございます。

彼がこれからどんな生き方をしていくのか。
彼がこれからどんな旅をしていくのか。

これは作者にも「まだ」わかりません。

ただ、彼が少しでも成長していけるように、見守っていくつもりでいます。

P．11：　～☆月☆日　日本某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

”そろそろ誕生日だから、一度帰ってきたらどうだ？”

恋人から、滞在先のホテルに手紙が来た。
手帳を見る。
ここしばらく開いてなかったから、しおりは2ヶ月前にはさまっていた。

故郷はそんな時期かぁ・・・。

故郷には、中国の伝説にまつわるお祭りを各地で行う。

・・・オトナの解釈で要約すると。

”仕事に支障をきたすほどのバカップルがおりました。
そのあまりのバカっぷりに怒った神様が、星の川をはさんでふたり

を引き離しました。
しかし、悲しみに暮れるふたりの姿を見て、神様は年に一度だけ会える日を与えたのでした・・・”
という伝説である。
で、その日が私の誕生日でもあるわけで・・・。
私たちが住んでいる近くの地域で、お祭りが開催されるのだ。
”今ならまだ間に合うぞ。”
私は荷物を一気にまとめると、旅券会社に電話をしたのだった・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

およそ１８時間後。早朝。
私は故郷の地に立った。

あの後。
私は奇跡的に、キャンセル分の席を取ることができたのだった。
そしてありがたいことに、彼が迎えに来てくれていた。
”朝早いのに・・・大変だったでしょ？”
「なになに。聴きたかったラジオ番組があったから、ずっと起きてたんだ」
”あはは・・・あなたらしいね”

「あ、そうそう。「南国の幽霊番組」、深夜にも放送を始めたみたいだぞ？」
”え！？嘘ぉ！？てか聴けたんだ！”
軽口を叩きあいながら、彼の家に向かったのだった。
・・・電車内で、お互い爆睡していたことは言うまでもない。
彼の家に到着して、更に朝寝。

起きた時は昼過ぎだった。

”あ、そろそろ準備しないと・・・”
「何言ってんの。お祭りは明日だよ」
・・・・・・・・・・・・・・・・
私は、時差ボケにならない人間だ。
エコノミークラス症候群も慣れっこ。
でも、旅をしていて未だに慣れないのが、日付変更線をまたいだ時の時間の換算。
ワールドタイムの時計ほしいと、切実に思う今日この頃だ。

夕食の時。
彼曰く、明日は「お楽しみ」があるそうだ。
しかも私にはたまらない事だという。
何度聞いても教えてくれない。
ぬぅ・・・。気になって寝れないじゃないか。
私はむくれたのだった。

・・・結局、寝たのだが・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

翌日。
会場に来て、私は飛び上がるほど喜ぶことになった。
今年から、浴衣の貸し出しサービスを始めたらしい。
これはもう利用するしかないでしょう！

１時間後。
私は藍染めの生地に白抜きのとんぼ柄、赤のへこ帯を蝶結びに。
彼は灰色の浴衣に、黒の帯を貝の口に結んでいる。帯には上下に細い白のラインが入っていた。
和装に変身した私達は、会場である大通りに向かった。

赤・緑・青・黄・オレンジ等々・・・
私の視界は、様々な色彩で彩られていた。
最近荒涼とした風景しか見ていなかったから、とても新鮮だ。
やはり中国の伝説の為か、赤×金の配色の飾りが多い。
くす玉、吹き流し、地元の子供達が描いたバカップル・・・もとい、織姫と彦星の絵。
忘れちゃいけない屋台のごはん。
焼きそば、たこ焼き、お好み焼き。
私は綿あめをついばみながら、彼の後ろを付いていった。
ショルダーバッグのベルトを掴みながらだが。

あるステージでは、「ミス織姫」なるイベントが開催されていた。
要はミスコンである。
和装美女に目を奪われている男性が多数。
そんな男性に鋭い眼光を飛ばしている女性も多数。
私は思わず苦笑した。
何故か彼も苦笑していた。

・・・ちょっとは鼻の下でも伸ばしてみろっつーの。
面白くないなぁ・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

一通り見終わって、私達は川べりに足を運んだ。
慣れない下駄で歩きつかれた足を放り出す。
すると
「はい、誕生日プレゼント」
と言い、彼は手のひらサイズの箱を差し出した。
私は受け取る。
”開けてもいい？”
彼は「どうぞ」と手で促した。

箱の中に納まっていたのは、バックライト付の黒いデジタル時計だった。
順繰りにメニューセレクトボタンを押すと、ワールドタイム機能がついていた。

「おまえさんの手紙を読んでいると、いつも日付が2日ほど過去になっていたり未来になってたりするんでね。日付変更線に慣れてないんだと思ってさ」

”うわぁ・・・。ありがとう！”

浴衣に足を取られ、半ばもつれるようにして彼に抱きついたのだった。

「でも、天の川が見えないね」
そう。私は生まれてこの方誕生日に晴れたことがないのだ。
”別に、いいんじゃない？”
彼が不思議そうに私を見る。
”だって、いくらバカップルでも覗き見されるのは嫌でしょうしー”
「ごもっともだな」
彼は腹を抱えて笑い出した。
”せいぜいいちゃいちゃしてなさい。会えるのは1日だけなんだから・・・”
私は曇った夜空を見上げ、心の中でそう言ったのだった。

ｆｉｎ．．．

P．１１：　～☆月☆日　日本某所にて～（後書き）

旅日記シリーズ第１１弾。
最後までお読み頂き、ありがとうございます。

一応誕生日記念と言うことで、執筆させて頂きました。
ハッピーバースデー自分。

＊バカップル全開のお話ですが、リアルではこんなにいちゃついていませんのでご了承下さい。

七夕祭りのモデル＞＞
神奈川県平塚市の七夕祭りがモデルになっています。
・・・念の為ですが、浴衣の貸し出しサービスは行っていません。

P．１２：　～※月?日　日本某所にて・前編～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

訪れた土地で、偶然お祭りに出くわした。
訪れた先の土地で何かしらのイベントに出くわすと本当に驚く。

「お祭りは誰もが童心に帰る事ができる」

昔からそう言われているが・・・私も例外ではなかった。
・・・小さい頃、お祭りの日って朝からワクワクしてたよなぁ・・・。
それが偶然出くわしたとなれば、サプライズも加わって、ワクワクドキドキ度数１５０％ですって！
祭り会場に一歩足を踏み入れると、香ばしい香りと明るい喧騒に包まれる。
移動舞台で演奏されるお囃子。
お祭りは始まったばかりのようだ。

近くにあった、食堂を兼ねた民宿に交渉してみた所、部屋が空いているようなので一泊泊めてもらうことにした。

荷物を置いて、部屋の窓からお祭りの様子を見ていると。
「失礼いたします」
と、控えめにふすまがノックされた。
私が返事を返すと、ふすまが開く。

そこにいたのは、私と歳が近そうな女性だった。
長い黒髪がよく似合う、美人さんだ。
少し危なっかしい手付きでお茶の準備をはじめる。
”えーと・・・。女将さんですか？”
「え？あ、いーえー。違いますよー」
彼女は私の問いに、リズミカルな返答をくれた。
”えーと、じゃあ・・・”
「ここの娘です。両親の手伝いをしてるんですよー。母は今お嚙子の本部に出張中です」

娘さんは一度地元を離れて別の仕事をしていたけど、仕事が行き詰っていた事と、やっぱり家業を継ぎたいという思いから、帰郷したらしい。
帰ってきたときのご両親の反応が怖かったとか、笑いながら話してくれた。

「でも、やっぱり小さい頃から両親の姿を見てきたからかなー？って思って」
”なるなる。将来は女将さんですか”
「はいー！まだまだ『女将見習い』ですけどねー」
娘さんは笑顔でVサインを向けた。
そう言われるのが嬉しくてたまらないようだ。
「お婿さんが来てくれれば、なおさら嬉しいんですけどねー。これ

で４代お店を継げるんですよー」
頬に両手を当て、今にも踊りだしそうな勢いだ。
止めた方がいいのだろうか？
「はー、がんばろ。ところでお客さんは何をされてるんですか？」
”え？私？”
いきなり話しの矛先を向けられて、私は驚いた。
「はいー。何か旅慣れてる感じなんで、もしかして旅行雑誌のライターさん？」
”えーと・・・。似たようなモノです”
返答に困ったが、何度か手記を出した事があるので嘘ではない。
「えーすごい！世界中を飛びまわる女性、かっこい～！」
”あははは・・・”
私が苦笑していると、階下から娘さんを呼ぶ声が聞こえた。
「はーい。すいません。ちょっと失礼しますね。ゆっくりお祭りを楽しんで来て下さい」
娘さんは一礼すると、ぱたぱたと階段を降りていった。
ふむ。ユリさんね。
きっとこの民宿の看板娘なんだろうな。
階下のお店で、いろんな人から声をかけられてる。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

食堂で海鮮丼を食して、突撃準備ＯＫ。
漁港ならではの安さとうまさに納得し、お祭りにいざ突入～！

今年２度目の屋台めし。
食後のデザートにはリンゴ飴。もちろん特大サイズ。
落書きせんべいに夢中になって、射的でお菓子をごっそりゲット。

飴細工職人の腕に思わず唸り、からから回る風車も目に美しい。
小さい頃に集めていたお面の数々。
喉が乾いたら、かちわりで喉を潤す・・・。

これだから故郷のお祭りは好きだ。
何歳になっても、楽しさが変わらない不思議。

だけど・・・。
今日はちょっと違った。
さっきの娘さんとの会話が頭から離れなかった。

しっかりしていたなぁ。
同じ歳で、ちゃんと将来見据えていて。
私は何をしてるんだろう。
当てもなく、ぶらぶらとあちこちを歩き回って。

ちゃんと将来の事を考えていた？
これからどうやって生きていくの？

いろんな事が頭を巡る。
最初の方はかする程度にしか感じなかったけど、時間が経つにつれ、
この思考は重みを増していった。
前方に集中できずに、何度か人にぶつかった。

これはまずい。
少し人混みから離れた。
しゃがみこんだ通路の先には、下町のような裏路地が顔を覗かせている。

こういう所、一度来てみたかったんだよなぁ・・・。

何かに呼び寄せられるように、私は裏路地に入っていった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

車一台すらも通れない裏路地を、私は歩く。
家々から漏れ出る笑い声。
風鈴の涼しい音色。
時折すれ違う、水鉄砲を持った子供達。
夏の夕暮れを感じさせる、ひぐらしの鳴き声。
裏路地を彩る、真っ赤な夕日。
夕日と影が織りなす、赤と黒のコントラスト・・・

考えを振り切りたくて、私はひたすら歩いた。
東西南北どこを歩いているのか。
どこへ向かおうとしているのか。
何もわからないまま、ひたすら歩いていた。

気が付くと。
私は右も左もわからなくなっていた。
路地裏の入り口も出口もわからない。
軒にぶら下がっていた提灯もなくなっている。
お囃子の音も聞こえない。
林立する家屋の壁には、夕日が差している。
オレンジ色の壁面を時折素早く駆け抜ける、黒い影。
人のようでいて、人にあらず。
影はそんな形をしていた。

きゃはははは！

私のすぐ後ろを、子供の笑い声が通りすぎた。
振り向いても、姿が見えなかった。
形の見えないモノに急かされている気がして、ものすごい焦燥感に駆られた。
小さい頃、道に迷って家に帰られなくなったときの、あの感覚。
妙に赤い景色の中に置き去りにされ、全身に鳥肌が立った。
冷や汗が背中を伝う。

やだ・・・やだ・・・！！

「もしもし」

問いかけと共に肩を叩かれ、私はぎゃっ、と飛びあがった。

私の背後にいたのは、浴衣姿のおじいさんだった。

おじいさんの優しげな目を見た瞬間・・・
私はその場で腰を抜かしたのだった。

Ｔｏ　Ｔｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

P．１２：　～※月?日　日本某所にて・前編～（後書き）

旅日記シリーズ史上初（大げさ?）。
前後編の作品になりました。

久しぶりに文章を書いたので、かなり粗があるかと思います。

舞台設定等は、後編に書こうかと思います。
もう少し、お付き合いください・・・。

Ｐ．１２：　～※月?日　日本某所にて・後編～（前書き）

こちらはＰ．１２：　～※月?日　日本某所にて～の後半部分となっています。
まず前編をお読みになってから閲覧されることをお薦めします。

Ｐ．１２：　～※月？日　日本某所にて・後編～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中、私は迷子になった・・・

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊
―＊―＊―＊―＊―＊―

「ここは『袋小路』と呼ばれる所でね」
民家の縁側に座ると、おじいさんはそう言ったのだった。
おじいさんは呆けた私の手を取り、勝手に民家の庭に入りこんだかと思ったら、ちゃっかり冷酒を拝借していた。
私にも勧めてきたが、私は超下戸なので丁重にお断りした。

”袋小路・・・ですか？”
冷酒代わりに拝借した麦茶を飲みながら、私は聞き返す。
「ああ。物事に行き詰まって先に進めない時に『袋小路に迷いこんだ』と例えるでしょう」
おじいさんはぐいと杯を空け、腰のポーチから煙管を取り出した。
手早く組み立て、手近にあった火の付いた蚊取り線香で葉に火を付ける。
うまそうに煙を吐き出し、満足そうに頷いた。
うん？どこかで見たような表情だなぁ・・・？

「時々迷いこんでくるのがおるんですよ。いろいろな事でにっちもさっちもいかなくなった人が。わしゃあここの番人みたいなモノですわ」
”その方達は、どうなったんですか？”
「知らん。でも8割がたは『袋小路』から抜けていくんだがねぇ」
残りの2割は、どうなったのかは聞かないでおいた。
知らぬが仏、って言うし・・・。
「そうそう、それが賢明ですな」
豪快に笑うおじいさん。
てか私の思考、読まれてた・・・？
「さて、お嬢さんも『袋小路』にいらしたということは・・・何か悩まれている事でもあるのですかな？」
私は麦茶を縁側に置くと、「袋小路」に迷いこむまでの事をおじいさんに話した。

将来をしっかりと見据えている同年代の女性との会話。
彼女と比べて、私は何をしているのかと。
今までの生活、間違ってたんじゃないのかと・・・。

おじいさんは黙って肯きながら、私の話を聞いてくれていた。
「ふうん・・・。」
ひとつ唸り、周りを一瞥すると、すい、と煙管であさっての方向を指した。
「そこの少年。何か言いたそうだねぇ」
煙管を差した先には。

ペルーで別れたルイス君がいた。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

”ルイス君・・・！？”
「旅人さん、こう言ってくれたよね」
私の言葉を遮るように、ルイス君は口を開いた。

「『その選択が間違いだと言われても、君が納得できたのなら、それはそれで正しかったと胸を張って言えるでしょう？』って。あれ、嘘だったの！？」

”え・・・それは・・・”
言いよどむ私に、更にルイス君はたたみ掛ける。
「僕、旅人さんのその一言を聞いて、旅に出たんだよ！僕の選択が正しかったんだって胸を張って言えるまで、僕はいろんな世界を見ていこうって！」
・・・・・・・・
「それに旅人さんは『自分が後悔したくないから旅をしている』って言ってたよね。今、旅をしていた事を後悔してるの？僕にはそんな風には見えなかったよ！」
私は何も言えなくなる。
「旅人さん、僕と話していた時、すごくいきいきしてたもん。今の旅人さんの顔、僕キライだよ！！元気出してよ！ねえ！！」
私はうつむく。

人の生き方は人それぞれ。
人生に、「間違い」も「正しい」もないんだ。
正しいか否かってことも、自分が決める事。
自分が一番わかりきってた事じゃない・・・。

「答えは見つかったかい？」
”はい。これからどうしていくかまでは”

「うむ。そうかい」
私の返答に、おじいさんは微笑んだ。
”ルイス君、ありがと・・・って、あれ？”
顔を上げたとき、すでにルイス君はいなくなっていた。
私は庭を飛びだし、辺りを見まわす。
「あの少年なら、もうおらんよ」
”あれぇ？お礼にあげようと思っていたモノがあったのになぁ・・・”
「いえいえ。お礼はもう頂きましたよ」
え？

疑問符を浮かべ、縁側に振り向く。
おじいさんは立ち上がると、顔をあげた。
いや。
一瞬までおじいさんだったのに、『歩の彼』に姿を変えていた。

「孫の事をよろしく頼むよ。歩さん」
”あ・・・！待っ・・・！”

ごう。

潮の香りを含んだ風が突然襲いかかり、私は腕で顔を覆った。
風が治まったその跡には、彼らの姿はなく、裏路地が広がっているだけだった。

けけけけけ・・・

ひぐらしの鳴き声に、微かに混じって聞こえた、いたずらっぽい笑い声。
目線を上げると、そこには小さなお社があった。

キツネにつままれたような気分で裏路地を進んだ。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

うーん。さっきのおじいさん。彼のおじいさんだったのかぁ・・・。

彼のおじいさんは、彼が生まれる前に亡くなっていると聞いていた。

”私を助けてくれたのかな？しっかしホント、彼にそっくりだったよなー”

そんなことを考えながら、足取りも軽く、拍子抜けするくらいあっという間に無事に出口に辿りついた。

金魚すくいの屋台を通り過ぎ、私は民宿へと足を向けた。

あちこちを歩いていて、いろんな文化に触れて、感じたこと。

全部が全部プラスじゃないけど、私にとって他には得られない何かをたくさん得ている。

もっと色々見て、触れて、感じたい事がたくさんある。

自分が納得できるまで、旅は続けよう。

まだまだ私も青いなぁ・・・。

・・・そんな事を考えながら歩いていたら、見事に迷子になった事を追記しておきます。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊
―＊―＊―＊―＊―

「あー。それ、キツネに化かされたんですよー」
麦茶を持ってきてくれた娘さんに一連の出来事を話して返ってきた
一言に、私は思わず目を丸くした。
”え？キツネ・・・？”
化かされたって・・・。え？？
「ええ。キツネっていたずら好きなんです。それにお客さんがいた
辺りって、お稲荷さんが奉ってあるんです」
あのお社がそうだったんだ・・・。
「外から来た方が、よく被害にあうんですよー」
”な、何だぁ・・・そうだったの”
ちょっとがっかりだ。
ドラマチックなことを考えてしまった、自分が恥ずかしい。
「何か盗られていませんか？主に食べ物とか・・・」
くすくすと笑いながら、娘さんが聞く。
私は怪訝な表情を浮かべながら、持っていったメッセンジャーバッ
グをひっくり返した。

水筒、貴重品、フェイスタオル、リンゴ飴、射的の景品のお菓子の
数々・・・。

”全部無事です”
でもまだ娘さんは笑っている。
ぬぅ。何なんだ？
「ごめんなさい。手に持っているビニール袋、持ち上げてみて下さ
い」
私は首を傾げつつも、ビニール袋を持ち上げた。
・・・妙に軽い。

中を見ると・・・・
”・・・あーーーっ！？お好み焼きがない！！”
たまらず娘さんは、腹を抱えて笑い出した。
「そのおじいさんがキツネだったんでしょうねー」
”え？”
「『お好み焼き欲しさに、お客さんを自分が作った変な世界に迷わせて、自分がお客さんを助けたお礼にお好み焼きをもらっていった』って所でしょう。あはは～芸が細かい～」
”いえいえ。お礼はもう頂きました”
おじいさんの言葉の意味がようやく理解できた。
そして私もつられて大笑いしたのだった・・・。

まんまといっぱい食わされた。
「袋小路」の景色も、ルイス君も、キツネの作り物だったのね・・・。
でも、不思議と怒る気は起きなかった。
・・・お好み焼き欲しさに、あそこまでするのかなぁ？って思ったから。
何だかんだで、私の迷いを吹き飛ばしてくれたから。
ケケケケ・・・
お祭りの喧騒に紛れて、いたずらっぽい笑い声が、微かに聞こえた。

fin・・・

後日談。

彼にせがんで、おじいさんの写真を見せてもらった所、「袋小路のおじいさん」とはまったく違う顔だった事を追記しておきます。

P．１２：　～※月?日　日本某所にて・後編～（後書き）

あとがき

旅日記シリーズ　～※月?日　日本某所にて・後編～
最後までお届けする事ができました。
妖精の次はキツネに化かされた歩です（笑）

物語の舞台＞＞
神奈川県三浦市の三崎漁港付近がモデルになっています。

食堂を兼ねた民宿＞＞
くろば亭というお店がモデルになっています。

実際にも宿泊することができます。
その際には、店舗に電話でアポを取りましょう。
突然押しかけちゃダメですよ！

実は・・・＞＞
三崎漁港を訪れた時に、実際にお祭りをやっていました。
久しぶりにお祭りを堪能したのと、友人の「小説の歩さんみたい」
という一言で、このお話を書き上げた次第です。

・・・何度か細かい景色を確認したくて、ゲーム「トロと休日」を
プレーしていたことはナイショです。

久しぶりの文章書きだったので、粗がありまくりかもしれません。
ご指摘等ありましたら、ぜひぜひお願いします。

P．13：　～●月※日　アメリカ某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

地元の方に「是非」と言われて来たけれど・・・。
こりゃ、すごいや・・・。

現在は暦の上では真夏。
でも、私の目の前は白一色。
万年雪かと思ったら、ざらりとした感触が靴越しに伝わってきた。
何とも驚いたことに塩の平原だと言う。
・・・さすがに口にはしませんよ?興味はあるけど・・・。

ざく　ざく　ざく　ざく

少々重たい足音を立てながら、私は真っ白な平原をひたすら歩いていた。
視界の端に、何かを捕らえる。
そちらに目を向けると、一軒の小屋があった。
私は進路を変え、その小屋へと向かった。

・・・・・・何においてもそうなんだけど、私の思考って、危険より興味の方が勝っちゃうんだよなぁ・・・。
危ないことに遭遇するたびに、いつも彼や友人達から「いい加減その癖を直せ！」って怒られるくらい。
でも、私は快楽主義者で自称・開拓者なのだ。
ふはははは。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

小屋には男性がいた。
小屋の中は、キッチン・リビング・本棚。そして、エアコン。
必要最低限の物しか置いていなかった。

「ここまで来る人は珍しい」と言われた後、冷えたミネラルウォーターを頂いた。
何せ外は５０℃近い炎熱地獄。喉もカラカラである。
普通の人なら、この時期に来ないとの事だ。

”なら何故、あなたはここにいるんですか？”
私は聞いた。
「え？」
私の問いに、彼は不思議そうなイントネーションの声を上げた。
”・・・いえ、食料の買い出しとか不便そうじゃないかなぁ、って思って・・・”
「はは。食料に関しては、業者さんの定期便が来るんだ。おかげさまで不自由していないよ」

ああ、なるほど。
私は納得し、頷いた。
彼はミネラルウォーターのおかわりを私に注ぐと、話を始めた。
「ここに住み始めたのはね、”彼女”の面影を探しているからなんだ」
”・・・はい？”
突然話が飛んで、私は首を傾げる。
「彼女とは、雪の舞う冬に出会ったんだ。お互いに本当に一目惚れだった。もう、即座に永遠を誓ったくらい」
・・・やはり興味が勝った。
男性の話に耳を傾ける。
私、意外と恋話が好きなのよねぇ・・・。
「でも、彼女は冬の終わりに亡くしてしまった。持病が急激に悪化したんだ。身体が弱いのは知っていた。でも突然すぎたよ・・・」
・・・・・・
「もちろん私はショックだったさ。神様を恨んだよ。でも・・・」
”でも？”
「彼女との思い出に浸れる場所を見つけられたんだ」
”・・・それがここだったと”
「そう！管理人さんに必死に頼み込んで、管理者として住まわせてもらったんだ！」

”・・・この、炎熱地獄的な場所に・・・？”

「うん。それは承知の上だったさ。でもさ・・・」

彼は一拍置いて口を開いた。

「ここは一年中『冬のような風景』だろう。溶けない雪に囲まれて、好きなだけ彼女との思い出に浸れる。あの頃に戻れるんだ」

・・・・・・。

私は外を眺めた。

確かに、一面の「冬景色」。

「ああ、つまらない話を聞かせたね。済まなかったよ」

”いいえ。素敵なお話しをありがとうございました”

男性からミネラルウォーターを分けてもらい、丁重に礼を言ってから小屋を後にした。

塩の平原を「溶けない雪」と彼は例えた。

きっと彼の時間も、彼女が亡くなった時に止まってしまったんだろう。

過去の思い出を大切にしているのか。

それとも
届かなかった思いに、ずっと繋がれたままなのか。

私には判断できなかった。
どっちもありなような気がしたし、どちらにしても、私には否定する権利はなかったから・・・。

でも・・・。
何とも複雑な心境で、私は塩の平原を後にした。

P．１３：　～●月※日　アメリカ某所にて～（後書き）

旅日記シリーズ１３弾。
最後までお読み頂き、ありがとうございます。

今回の舞台＞＞
デスバレー国立公園です。
その中の塩湖が舞台となっております。
あまりの暑さに塩水湖が干上がってしまい、砂漠一面が真っ白に見えます。

作中の歩は夏にここに訪れたのですが、これは自殺行為なのでやめておきましょう。
５７℃という最高気温を叩き出した場所でもあり、水分があっても塩辛くて飲めない。
このような経緯から「デスバレー（死の谷）」と呼ばれるようになったのです。

観光シーズンは1月～3月くらいがいいと言われています。

私なら＞＞
恋人を亡くしたことを受け入れ、気が済むまで泣いたら、また前を向いて歩いていくと思う。

歩けないほどの悲しみにあるのなら、その場に留まっていてもいいと思います。
ただ、前だけは向いていてほしいと。

辛い境遇にある人に対して、いつも思う事です

P．１４：　～◎月◎日　イタリア某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

いい時期にここを訪れた。
以前から興味を持っていたカーニヴァルと重なったのだ。

マスケラをかぶった仮装行列で有名な街なので、今私は仮装パーティーを堪能しているのだが・・・。
どうやら明日、オレンジ投げとやらをするらしい。
以前訪れた国の、トマト投げ祭りみたいなモノなんだろうか？
（トマト好きの友人は、『なにぃぃぃぃ！？農家が一生懸命育てたトマトを（以下略）』って小一時間ほど憤慨してたっけ）
怪我しないのか？
謎は深まるばかりである。
マスケラの下で、私は眉根を寄せた。

・・・ちなみに私は今、黒いマントを羽織って赤い羽飾りの付いた、顔の上半分を覆うマスケラを着けている。
マスケラは、目の部分が金色のアラベスク模様に縁取られている

断っておくが、ウケ狙いではない。
決してびっくり人間の人ではない。

―＊―

スタンドバーでレモネードを片手に、バーのオーナーと話していたところ。
本当に、丸のままの生オレンジを投げあうとの事。

”けが人は出ないんですか？”
「いえ。けが人は毎年出ますよ」
そんなきな臭い事、笑顔で言わないで下さい。
私は少し身を引いた。
”・・・さぞかし、凄いんでしょうねぇ・・・”
何とか相槌を打つ。
「もう壮観ですよ！通りは一面オレンジ色！飛び交うオレンジ！すっきりしたオレンジの香り！」
確かに非日常的な光景であるとは認めます。掃除の人が大変だろうなぁ。
つか、「オレンジ」連呼しすぎです。
何故か気圧され、更に半歩後ずさる。
「旅人さんも、ぜひ参加されてはいかがでしょうか」
ボーイの口調と笑顔で、きな臭くて血生臭い事を言わないで下さーい！
”は、はぁ・・・”
完全に私はドン引きし、部屋に戻った。

無論、夕食のデザートのオレンジは残したのだった。
あんな話しを聞かされたあとじゃあ、ねぇ・・・？

―＊―

翌朝。
フェスティバルのスタッフの声で目が覚めた。
カーテンを開け、外を見る。
うぉ・・・。
トラックから運ばれてくる木箱には、オレンジの山、山、山・・・。
（あれを投げるのかぁ・・・）
私は思わず、感心のため息を漏らした。

会場では、参加しない観客には赤いかぶり物の着用が義務付けられている。
私は赤いバンダナを装着した。
今年は様子を見て、面白そうだったら来年参加しようと思う。
「無いよりはマシ」程度の装備で、最前列に陣取る。
何でも観客にも被害が及ぶほど危険らしい。

オレンジ合戦の背景としては・・・
中世の独裁主君の圧政に苦しんだ、英雄率いる庶民達が一揆するシーンを再現したお祭りらしい。

悪役の馬車が会場にたどり着いた瞬間・・・
うおおおぉぉ！という掛け声と共にオレンジが飛び交う。

うおぁ・・・こりゃ確かに一面オレンジ色！すっきりしたオレンジの香り！
何か故郷の冬場の豆投げに似てるけど、怖えええぇぇ！！

観客もヒートアップして、歓声と野次が混じった声援を参加者に飛ばす。

うわぁぁぁ・・・お兄さん鼻血出てるよ！
あわわわ・・・オバサマ！エキサイトしないで！つか素手は反則でしょ！？
ひゃああ！リーダーのお姉さん、額割れてるから！美人が大無しですよ！？

きな臭くて血生臭さ全開な会場とは裏腹に、立ち上るオレンジの爽やかな香り。
カオス過ぎますってばぁ！？

絶対に参加しない。
そう心に決めた瞬間。

ごす

後頭部に鈍い衝撃。
足元に転がるオレンジ。
・・・けが人が出るって理由が、身を持って分かった。
痛いよこれ。

ただ、私は変な方にスイッチが入ってしまった。

”誰だぁーっ！？私にオレンジぶつけてきたやつはぁー！？”

私は一気にヒートアップ。
バンダナを剥ぎ、奇声を上げて群集に特攻していったのだった・・・

。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

結果。
頭にたんこぶ2つ。
腕と肩、背中に青あざ6個所。
全身から立ち上るオレンジの香り。
私の被害状況だ。

オレンジ投げが行われたストリートも、アスファルトの部分を探す方が難しい程に、オレンジの残骸で埋めつくされている。

さすがのホテルマンも、私の様相に驚いていた。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

部屋に入り、服と全身の洗濯をする。

しっかし、この国で妙にすっきりしたなぁ。
ここの所、物書きがスランプ気味だったし、仮装行列は、前から興味があったイベントだったし、友人達に教わったダンスが役に立ったし・・・。

いいリフレッシュになったかも。

”彼と友人達に、報告がてらに手紙でも書こうかな？”
湯舟に浸かり、痛む頭をさすりながら私は思ったのだった。

―＊―

余談。

夕食のデザートのオレンジは、しっかりと残したことを追記しておきます。

あんなオレンジ色の凶器、当分見たくないやーい！！！

ｆｉｎ．．．

P．１４：　～◎月◎日　イタリア某所にて～（後書き）

あとがき

旅日記シリーズ１４弾、最後までお読み頂きありがとうございます。

歩大暴走の巻です（笑）

それもそうですが、一度は訪れてみたい国のお話を書くことが出来ました＾＾

オレンジ合戦＞＞

イタリアのイブレアで、カーニヴァルの締めとして行うそうです。

作品内では歩が特攻していきましたが、実際には観客席にはケガ防止のための網が張られます。

それでも観客が巻き込まれる事もあるって・・・。

相当エキサイティングなんでしょうねぇ・・・。怖っ！

仮想行列＞＞

ものすごく興味のあるイベントです。

マントを羽織って、仮面をかぶって、踊ってみたい・・・↑ただのアホです。

実際に箱根でマスケラ（仮面）を見たことがあるのですが、どれも美しい。

本場イタリアに行けば、一点ものの貴重なものもあるそうです。

まさに芸術品です。

P．15：　～△月×日　アフリカ某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

何だか変わった・・・と言うより、変な名前が多い部族だ。
たまたま電車から降りた先で見つけた部族の印象だった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

部族の人によると・・・。
首長が名前をつけることになっていて、「首長がテントから出た時に見たもの」の名前をつける。

サンライズとか、ブルースカイとかならまだわかる。
シルフも何とかＯＫ。
きっと強風でも吹いていたのだろう。

ただ・・・。
明らかにおかしいだろ的な名前が・・・
フライングバード？

ツードッグファイト??
ボルケーノ???
・・・・・・・・・・・・
うちの故郷に来たら、明らかに新聞の三面記事モノですよ?
・・・でも、ボルケーノは何か分かる気がする。
どこかの奥さんが怒り狂っていたのだろう。

私のネーミングセンスはゼロだが、首長ほどひどくはない・・・と自信を持って言える・・・ようになった。
今日初めて。
・・・嬉しくないけど。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

昼食を振舞われているときに小耳に挟んのだが、表立っては言わないけど、部族の人々も首長のネーミングセンスには辟易しているらしい。

“そりゃあ、そうだよなぁ・・・。
むちゃくちゃな名前、付けられたくないもん。”
私はぼそっとつぶやいたのだった。
部族の人々も、私の一言に苦笑していた。

昼食後。
やはり長老も私の発言を耳にしたていたのか、長老が私に提案した。
「今日、赤ん坊が生まれる。そこまで言えるのなら旅人さんが名前をつけてくれ」

と。

私は快諾した。

出産シーンに立ち合いたかったが、部族のしきたりで、産婆と夫以外の人が立ちあう事は禁止されているとのこと。

・・・一女性として、経験してみたかったんだけどなぁ・・・。

待つしかないか。

来客用のテントがあてがわれ、私は夜明かしした。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

・・・夜中。

不穏な会話が風に乗って私の耳に入ってきた。

・・・ふぅん。そう言うこと。

私はトランクから、ある物を取り出した。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

明け方。

おぎゃぁ・・・おぎゃあ・・・。

いつの間にかテントの骨組みにもたれかかって、うとうとしていたらしい。

私はテントから出て、外を見る。

「無事に生まれましたぞ！さあ旅人さん、この子のお名前を！」
赤ちゃんは女の子だった。

実はもう、私は決めていた。
”ティアナ”
”ここの国の言葉ではありませんが、「夜明け」という意味です。
そして、私がテントから出て、始めに見えた物です”
部族の人々は「おおっ」と歓声を上げた。
「素晴らしい！」
「いい響きだ！」
えへへへへ。
誉められて嬉しかったけど・・・。

首長はプライドをいたく傷つけられたらしく、私に敵意を向けていた。
側近の男達に命じて私の周囲を取り囲む。
やっぱりね。
おぉ、棍棒持ってるよ。

同時に私は動いていた。

後ろ手に持っていた、缶ジュースほどの大きさの黒い缶のボタンを押し、うろたえたふりをしながら、数秒待つ。
そして、缶を彼らの方に放り投げた。

彼らが一瞬たじろいだ瞬間、私はをトランクを抱えて回れ右。
一番弱そうな男を蹴り倒して、猛ダッシュ。
3・・・2・・・1・・・はいっ！

「はいっ！」という心の掛け声と同時に、ガスの噴出音と共に苦痛の悲鳴が上がったのだった・・・。
前日から、不穏な空気が漂ってたのは感じ取っていたんだよねぇ・・・。

昨晩、グレネードタイプの催涙スプレーの安全キャップを外しておいて正解だった。
てか、寝込みを襲われると思ってたんだけどなぁ・・・？

取りあえず、赤ちゃんに被害が及んでいませんように・・・。

─＊

5分ほど走り回って、鉄道に飛び乗る。
さてさて。危機も脱したことだし。
今度はどこに行こうかなぁ？

私は荒い呼吸をしつつ、青いラベルのスポーツドリンクを一気にあおったのだった。

─＊

で。
赤ちゃんの名前だけど・・・。
・・「ある物」の名前だったと言うことは内緒にしておこう。
だって私、ネーミングセンスゼロなんだもん。

そう言う私も、やっぱりあの首長に負けていないかもしれない・・・・。

fin・・・

P．１５：　～△月×日　アフリカ某所にて～（後書き）

旅日記シリーズ１５弾、最後までお読み頂きありがとうございます。

アメリカンジョーク全開でお届けしました。
本当のアメリカンジョークでは、もっと卑猥な名前が出てきますが、
作品削除されるのを恐れて極力ソフトになるようにしました。
そこが一番苦労したかもしれません（ぇ

最近よく聞く、（歩に取っては）珍妙な名前。
どう考えても、名前の響き重視で、使っている漢字はもはや当て字。
新しい読み方まで作っちゃうツワモノも。
・・・その辺はある意味、感心していたりもするのですが・・・。
あと、意外と多いのは「憂」を使った名前。
「何で？」と思った方！
辞書を引いてみてください。

教養って大事だなぁ…。と思う次第です。

赤ちゃんの名前＞＞
「ティアナ」という「自動車」の名前です。
意味は作中に書かれている通りです。

お前はアホかと突っ込まれるのは覚悟の上です。

歩の危機脱出シーン＞＞
リアルの私は、あんなに機敏には動けません。
パニくるのがオチです。

ちょっと書いてみたかったのです。

さてさて・・・＞＞
実はこの旅日記シリーズ、終わりまで第３コーナーを切りました。
今後の展開は、かなり急になるかもしれません。

P．１６：　～△月×日　ブラジル某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

―＊―

皆様は、「南国の幽霊番組」を覚えていらっしゃるだろうか。
今私は、「南国の幽霊番組」のＤＪ・マリアの故郷に向かっている。
ホテルに滞在している時、彼女から彼経由で私宛にカーニバルのお誘いの手紙と、チケットが送られてきた。
例の子犬クンも連れて来るという。
子犬クン、元気かなぁ・・・？

―＊―

空港に降り立つと、熱を帯びた風が吹きつけてきた。

ここは南半球。
故郷はまだ肌寒い季節だが、まだこちらは残暑真っ只中。
この国の気温が大規模なカーニバルよって、更に１０度ほど上昇する時期でもある。

当然人が集まれば、治安の悪さも比例する。
それを押してでも見てみたいと思うのが人間のサガなのではないだろうか。
いや、これは私の自論なんだけど。

そんな訳で、ホテルのセーフティボックスに即興でこしらえた段ボール製ダミートランクと、
「ばーかちん♪残念でした」等々けなし文句満載のダミーの札束を入れた財布を残したのだった。

メッセンジャーバッグ一個に、最低限の額のお金、水筒を詰めていざ出陣！

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

そして、再会。
「Ｏｉ（オウイ）・歩」
”やっほー、マリア”

挨拶を交わすと、ふたりはあの時と同じく笑いあった。
そこに、牛のバーベキューを5～6本と、豆のスープを抱えた子犬クンが帰ってきて、きょとんとした目でこちらを見ていた。
きっと彼女から、何も言われてなかったのだろう。

入場チケットを入手に出来たのは、彼女のおかげだ。
カーニバルのチケットは競争率が高く、販売開始数分で即完売するほど。
それでも見たい人は、ダフ屋に頼ることとなる。
ダフ屋もダフ屋で、客の足元を見ているのだろう。

日本円にして、８万円を軽く超える額で売りつけてくるらしい。
彼女がチケットを格安で手に入れられたのは、知人がチケットを取り扱っているらしいのだ。
子犬クンに関しては、日頃の感謝と慰安旅行のプレゼントだそうな。
・・・深くは追求しないが。

「さ、行きましょう」
「サキさん！スープがこぼれる！」
”あぁぁ・・・コロッケ食べたかったのにぃ・・・”
ふたりの抗議を無視して、マリアは子犬クンと私の手を引き、会場内へと進んでいった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

会場内は熱気があふれ返っていた。
マリア曰く「あと１０分遅かったら、中に入れなかったわ」とのこと。
現に入り口付近は修羅場と化している。

「牛肉コロッケにに包み肉、甘いのがいいんなら、とうもろこしのお菓子にチョコレート。ちょ～っと一杯やりたいんなら、ビールに糖キビのカクテルあるよ～」
よくもまあ、あそこまで営業トークが浮かぶもんだ。
コロッケを買い求め、私が思わず感心していると。
「ねえ」
牛のバーベキュー４本目に取りかかっていた子犬クンが、勢いよくこちらを見た。
よく食うね、キミ。

”おお、初会話。で、何？”
「サキさ・・・マリアさんに、酒、飲ませないでね」
”それはわかったけど、何でそんなに必死の形相なの？”
「・・・サキさん、ひどいからさぁ」
”・・・ほう。”
「火のない所に煙をおこすタイプだから・・・」
”・・・・・・あそう。”
「意外でしょ？」
”まあ確かに・・・。なら、私にも飲ませない方がいいぞ。”
「・・・え？」
”私も荒れるらしいから。”
「え・・・？『らしい』・・・って・・・？」
”私ほとんど飲まないんだけど、飲んだ時にやったことを覚えてないの。”
子犬クンはがっくりと肩を落とした。
「俺の周りには、酒乱しかいねぇのかよ・・・」
私は「どんまい」的な意味をこめて、彼の肩をぽんと叩いた。
”君と彼を、一度話させてみたいよ。”
はぁ・・・。
子犬クンは大きなため息をついた。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

時間まで3人で雑談をしていた。
マリアと子犬クンは、めでたく恋人同士になったとか。（こんにゃろめ）
その後彼もＤＪに加わり、今はふたりでラジオの運営をしているらしい。
最初はなかなか話すことが出来なくて苦労したと、子犬クンは苦笑

していた。
「でもだいぶ上達したのよ？」
「そ、そうかなぁ～？」
マリアの一言に、顔を真っ赤にして照れる子犬クン。
うん。彼の本名も教えてもらったけど、これからも子犬クンと呼ぶことにしよう。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

オープニングの音楽と共に、カーニバル開演。

その瞬間、会場はものすごい歓声に包まれた。
流れてくる地響きにも似たサンバのリズム。
子犬クンは「うわ！」と声を上げ、両耳を塞いだ。
「すごいでしょう！打楽器の演奏隊だけでも２００名以上いるのよ」
絶叫に近いマリアの説明によると、１チームが千人単位の大規模な構成で、山車もたくさん。
制限時間内に、とにかく踊りまくるというのだ。

大規模な移動ステージでダンサーがステップを踏み、観客にアピールする。
そして・・・
「ここの会場は、コンテストも兼ねているの。だから、みんな必死よ」
マリアの解説に、私は２度頷く。
子犬クンも「すげー！すげー！」とはしゃいでいる。
あ、チームの旗を持っている美女に投げキッスされて顔真っ赤にし

てる。

私は言葉も出なかった。
いや、言葉なんて必要なかった。

マリアはくすっと笑うと、
「この会場は、いろんなサンビスタ（サンバの名手の事）を生み出した所でもあるの。競争意識も芽生えるけど、サンビスタとオーディエンスが一体になれる。このカーニバルのいい所よ」
”それ、すっごくよくわかる”
言葉にしなくても、見ているだけでチームの熱気と情熱、そしてこのカーニバルへの思いと観客を楽しませたいと言う気持ちがひしひしと伝わってくるから。

気が付くと、私も子犬クンも踊りだしていた。
その様子を、マリアは微笑ましげに見ていた。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

長かったようで短かったカーニバルが終わって・・・
「何言ってるの？まだまだ終わりじゃないわ」
「はいー！？」
”へ・・・？”
子犬クンと私は、同時に声を上げた。
ふたりともすでにヘロヘロである。
「舞踏（バイレ）会に行かなきゃ、カーニバルに来たとは言えないわ」
対称的に、彼女はピンピンしている。
「サキさんまさか・・・お酒・・・」
「ええ、もちろん！」

「うあああああぁっ！いつの間に！？」
「あはははは！」
頭を抱える子犬クン。
からからと笑うマリア。
彼の証言を信じるのなら・・・今夜は荒れるな。
ちょっとスカしてみたのだが・・・私の予想は見事に的中したのだった。

主要ホテルやバーで、バイレは行われる。
周りの客が汗みどろの乱痴気騒ぎしている勢いもあり、マリアは大暴走。
子犬クンと私はダンスにほとんど集中できず、彼女のブレーキ役にまわっていた。
結局解放されたのは明け方だったのだった・・・。

私の宿泊先のホテルまで、3人で歩いて行った。
あれだけ騒いでおいて、未だに元気なマリア。
「「お疲れ」」
子犬クンと私は、ぐったりしながらもグータッチで別れたのだった。

・・・何だか彼と、妙な友情が芽生えたようだ。

―＊―

うー・・・。
イタリアに引き続いてのお祭り騒ぎだったけど、国によってここまで違うとはなぁ・・・。

シャワーを浴び、ベッドに横になったはいいけど、私は眠れずにいた。
身体は疲れているけど、興奮しきっていて頭が冴えているのだ。
”寝れて起きたら、歌で有名になった海岸にでも行ってみようかな？”
心の底からのんびりと過ごしたいと思ったのは、本当に久々の事だった。
身体がギシギシ痛いし、当分動きたくないかも・・・。
ｆｉｎ・・・

Ｐ．１６：　～△月×日　ブラジル某所にて～（後書き）

旅日記シリーズ、第１６弾。
最後までお読み頂き、ありがとうございます。
「南国の幽霊番組」に関しましては、「旅日記→Ｐ．０２」を参照して下さい。

そしてお祭り企画３編、書き上げることができました！
日本、イタリア、ブラジルの３つは、「いつか書こう」と思っていたお話でした。

今回の舞台＞＞
ブラジルはリオ・デ・ジャネイロでございます。

リオのカーニバルは、２月下旬～３月上旬くらいに行われるそうです。
一度カーニバルの写真集を見せて頂いたのですが、衣装も舞台セットも素晴らしい！
音楽はラジオでしか聴いた事がないのですが、是非是非生で見てみたいものです。

「どんな形であれ、自分を表現できる人が羨ましい」
私の知人が言っていた言葉です。
ふとその言葉を思い出し、そして私自身も体験した事のある「ダンス」をお題にして書いてみました。
・・・私、学生時代に南中ソーランを踊ったことがあって、その大将をやった事があるんですよね（＊ー－）σ

P．17：～○月○日　ブラジル某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。

－＊－

予告通り、私は海岸へと足を運んだ。
まだまだ残暑もカーニバルの疲れも厳しいが、私はパラソルをレンタルし、海岸へと赴いたのだった・・・。

メッセンジャーバッグからビニールシートを取りだし、砂浜に敷くと親の敵と言わんばかりにパラソルを砂浜に突き刺す。

周りは青い空と海。
内陸側を見れば、ブティックやヤシの木の列。ハイソな住宅街。
なかなかにおしゃれな街である。
ビーチには、これまたカラフルなビキニ姿の女性達。
Tシャツ・Gパン姿の私は、さぞかし浮きまくっている事だろう。

バッグを枕にして横になったものの、小型飛行機がぶんぶんと飛びまわっていて、エンジン音で眠れなかった。
少々イラついたが、よくよく見ると飛行機の末尾に垂れ幕が下がっていて、何かの宣伝をしているようだ。
何度も何度もビーチを往復するものだから、子供が必死に何かを訴

えているような気がして私は思わず吹き出し、飛行機に向かって手を振ったのだった。

そして、飛行機のエンジン音とは別に、かすかに優しげなヴィオランの音色が私の耳に入ってきた。
私は起き上がり、後片付けを済ませると、ヴィオランの音の発信元を探し、歩き出した。

ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー

パラソルを返却し、５分ほど砂浜を歩いた頃だろうか。
ひとりの青年が、堤防に腰かけてヴィオランを奏でていた。
おひねりの箱が見当たらない所を見ると、商売をしているわけでもないらしい。
あ、時々ペンを走らせている。作曲をしているのか。
思わずしげしげと眺めていた私に気づき、男性は「やあ」と軽く手を挙げたのだった。

”こんにちは”
「やあ。旅行者さんかい？」
”ええ。先日のカーニバルに合わせて来ました”
「ああ！そうだったのか。カーニバルはエキサイティングだっただろう？」
”ええ。ものすごい迫力でした。ところであなたはこちらで何をされてるんですか？”
「ああ・・・。僕は『彼女』の為に歌を作っているんだ」
”彼女・・・？”
どうやら彼は、マドンナ的存在の女性に恋をしているようだ。
彼女は勤めている喫茶店のアイドル的存在。

男性だけではなく、女性にも好かれている美女だとか。
・・・興味が勝った。
彼が彼女のいる喫茶店に、私を案内する事になったのだった。

その喫茶店は、ブティックストリートの一角にあった。
ログハウス風の店内には、ボサノヴァの有線が流れ、天井には送風ファンが回っている。
カウンターには、大きなサイフォンがボコボコと音を立てていた。
コーヒーを入れている真っ最中のようだ。
私は、アイスコーヒーを。
彼はルートビアフロートを注文した。
その時に来た彼女が、きっと彼お目当ての人なのだろう。
彼の表情に緊張が走った。

「あら、こちらの方は？」
彼女は少々含みのある笑顔を浮かべた。
「え・・・えっと。ついさっき知りあったばかりで・・・」
「え〜？本当に？ナンパしたんじゃなくって？」
「ほ、本当だってば・・・」
そんな軽い問答をしながら彼女はオーダーを取り、カウンターへと向かった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

”確かに、素敵な方ですね”
ブルネットの緩い癖のかかった長い髪。
こんがりと焼けた、小麦色の肌。
「絶世の」と付けてもいいほどの整った美しい顔には、エメラルドグリーンの瞳が納まっている。

「だろう？彼女は街中のアイドルなんだ」
”むぅ。だろうなぁ・・・。ライバルが多そうだけど？”
「それなんだよなぁ・・・」
「なぁにこそこそと話してるの？」
「うわ！」
”ひゃあ！”
私と彼は、驚いて顔を離した。
彼とこそこそと話している間に、彼女がアイスコーヒーを運んできたようだ。
「やっぱりラブコールなんじゃなくって？」
「だから違うってば！」
「ふふ、冗談よ。あ、ラブコールと言えば・・・」
ふと思いついたように、彼女は言った。
「あなた、好きな人に歌を作ってるんですって？」
「え・・・？」
男性は目を丸くした。
「ね、ね、どんな歌なの？聞かせて！いつもあなたの作る歌、とてもいいんだもん」
「え・・・えぇ！？」
彼も驚いていたが、私も相当驚いていた。
「４時で仕事が終わるから、ね？お願い！」
・・・「棚からボタもち」と言うことわざの実例を、私は今この瞬間目にした。
「あ・・・うん・・・」
彼女の勢いに気圧される形で、彼は頷いたのだった。
私は複雑な面持ちで、その様子を眺めていた。

－＊－＊－＊

４時を回って。
「お待たせ」
彼女は私服に着替え、店から出てきた。
少しずつ日は傾いてきている。
「それじゃあ、いくよ」
彼女の首肯を合図に、彼はヴィオランを掻き鳴らした。

♪青い空とエメラルドグリーンの海。
美しきかな　海辺の風景
でもそんな風景も　君が歩くだけで
全て霞んでしまう
君はダンスのように軽やかに　ストリートを歩いていく
そんな姿を誰もが振りかえり　君に魅了されている
僕もそのひとり
君の周りには人が溢れているのに　僕はいつもひとりぼっち
いつも一緒にいられたら　どれだけ幸せだろう
君は近づく事ができない高嶺の花。
それでも愛してると伝えたい、伝えられない

僕はいつもひとりぼっち♪

歌を終えると、彼は軽く一礼した。
私も彼女も拍手喝采。
私は曲もそうだが、「よく頑張った！」という意味合いを込めて。
彼女は・・・
「素敵な歌ね！この曲と歌なら、きっと好きな人にもあなたの気持ちが通じるわ」
最高でいて、とても残酷な感想を述べたのだった。

「・・・ありがとう」
彼は笑っていた。
そして、日が沈むまでしばらく3人で話したのだった・・・。

彼女と別れて。
私は、彼の恋が片思いに終わる事は充分すぎるほど予感していた。
だって私は喫茶店で席を立った時に、彼女が恋人と会っている所を目撃していたから。

「いいんだ。」
”え？”
私の思考を読んでいたように、彼はつぶやいた。
「ずいぶん前からわかっていたよ。彼女に恋人がいる事は」
”・・・じゃあ、どうして・・・？”
「いいんだ。僕は、彼女を本気で好きになれただけでも嬉しいんだ。誰かを想える事ほど、幸せな事はないよ」
”・・・・・・・・・・・・”
「例えそれが、実らない恋だとしてもね」
彼は寂しそうに微笑んだのだった。

―＊―

”ぬぅ。よくぞあそこまで彼女を想えるモノだ”
感心とも、じりじりとした気持ちにもなりながら滞在先のホテルに帰ると、私宛に手紙が届いているとボーイが手紙を差し出した。
差出人は彼だった。
やっぱりなー、と思いつつ、ほくほくしながら開封する。
手紙には私の状態を心配している事と、彼側の近況が書かれていた。

そして。
「一度帰ってきてくれないか？」
そうだよなー。しばらく留守にしていたし、マリアと子犬クンを見てたから久々に会いたくなってた所だし・・・

「大事な話があるんだ」

・・・・・何だか様子が変。
いつもの彼の文章じゃ、ない。

シリアスな雰囲気を感じ、嫌な事でない事を祈りつつ、私は電話の受話器を取った。

ｆｉｎ．．．

P．17：～〇月〇日　ブラジル某所にて～（後書き）

旅日記シリーズ第１７弾。　最後までお読み頂き、誠にありがとうございます。
舞台はブラジルのリオ・デ・ジャネイロ市にある、イパネマ海岸周辺です。

話のモチーフは、アントニオ・カルロス・ジョビンの名曲「イパネマの娘」の作成エピソードを参考に書いています。

学生時代に惚れた女の子に、実際に作曲した猛者がいた事を思い出したのと、前回のブラジル編で恋が実ったマリアと子犬クンとは対照的なお話にしてみました。

少ーし不穏（？）な空気が漂ってまいりました。

次回が最終話となります。

歩の旅はどうなるのか。
最後までお付き合い頂けたら幸いです。

Last page ～△月×日　日本某所にて～

私は歩。
旅が趣味の人間である。
旅の相棒は大きな革のトランクひとつ。
気の向くまま、時間の流れるまま、私はどこまでも行く。
そんな旅の途中の話である・・・。
―＊―
何があったんだろう？
悪い事じゃなきゃいいけど・・・。
いつもと違う彼の手紙に、私は戸惑いを隠せなかった。
そわそわ、落ち着かないけれど今私がいるのは空の上。
故郷に向かう飛行機の中なのだ。

到着まで、あと１０時間以上もあるのか・・・。
私はアイマスクを顔に引き下ろしたものの、なかなか眠れずにいたのだった・・・。
―＊―

そして１０数時間後。
まる１日座りっぱなしだったので、私は思いっきり背を伸ばした。
次いで、大あくび。
「お前はトドか」
いつの間にやら。
後ろにいた彼から頭を軽く叩かれ、私は完全に目が覚めた。
一度彼の家に行き、荷物を置く。

「今日一杯休んで、明日から出かけられそうか？」
”大丈夫だけど、何？”
彼は、少し遠出をしたいと言った。
私はもちろん快諾。
今回は相棒のトランクには、お留守番していてもらおう・・・。

＊－＊－＊－

（大事な話しは一体どこへ？）
そんな疑問が頭から離れなかったが、取りあえず彼の後に付いていく事にした。

緩い坂道をひたすら登る。
頭上には桜のトンネル。日本でしか味わえない風景。
近くに学校があるようで、チャイムの音が聞こえた。

あれ？この景色、どこかで見たような・・・？

坂を上った先は、開けた野原になっていた。
そこに大きな桜の木が一株。
その木の下に・・・
「あっ！本当に来てくれたんだ！」
その姿は紛れもなく、あの時の「桜の木の下の青年」だった。
青年は少しだけ、大人びた顔立ちになっていた。
”へ・・・？何で君が・・・？”
私は呆然。
すると、青年は出会った時のように、不機嫌そうな顔になった。
「去年の今日、旅人さんと俺が会った日じゃん」
”え・・・！？”
慌てて手帳をめくる。
「彼から俺の家に手紙が届いたんだ。彼の手紙には、歩から住所を聞いたって書いてあったからね」
確かに私の明確な住所は彼の家だけど・・・うわぁちゃんと手記になっていました。
「で、お前さんは『来年もまた行こう』って言ってたのを覚えててね。今日に間に合うかどうか焦ったよ。地球の裏側にいるって言ってたからさ」

彼が、更に追い討ちをかける。
「忘れてたの～？」
”ごめんなさい。完全に忘れていました”
私はジト目の青年に、思いっきり頭を下げたのだった。
”てか、何でお互いに知りあったわけ？”
どうやら彼と青年は、何度かの文通を通して彼と友人なったようだ。
彼は初対面の人に対しても、先入観を持たずに心を許せるタイプの人だ。
それ故、友人も多い。
何回か実際に会った事もあり、手紙上だけではなく現実でも良い友人になれたらしい。

「もうちょっとで『あいつ』も来ると思うよ」
あいつ・・・青年の友人の事だ。
「お～い！生きとったかぁ～？」
噂をすれば何とやら。
ここまであと数メートルという所で、青年の友人が大きく手を振りながら歩いてきた。

＊－＊－＊－

興奮状態から一転。尻すぼみになりながら、ご友人が彼に聞いた。
「えーと、まあそうです」
苦笑しながら彼は答えた。
「文通で仲良くなった例の人だよ。おめーも会いたがってただろ？」
「うわー、うわー。マジかいな！？」
ご友人、今にも踊りだしそうな感じです。
青年と彼は目を合わせると、ニッと笑った。
「セッティング、苦労しましたよねー。こいつは滅多に連絡とれなかったし・・・」
青年は友人を指差し。
「ああ。歩は地球の裏側にいるし・・・」
彼は私を横目で見て。
「「すい（ん）ません」」
私とご友人は恐縮しながらも、彼と青年のサプライズを嬉しく思っていた。
私もご友人と話してみたかったしね。

４人の各々の近況や、他にも彼との事で色々と質問攻め（主にご友人から）をされては青年に頭を叩かれ、私の旅の土産話等々・・・。
日が暮れるまで４人でどっぷりと話し込んだのだった。

大事な話って、この事だったのかな？
その割にはふと真面目な顔になる彼が気になって、私は首をひねった。
―＊―＊―＊

辺りは夕焼け空から夜空に変わりつつある。
「少し、歩こうか」
彼の提案に私は頷いたのだった。

丘を降りるころには完全に日は落ち、所々で桜がライトアップされていた。
”うわー、夜桜なんて初めてだよ！あの二人のことも含めて、ホントにありがとね。”
「・・・え？あ、うん。どういたしまして」
「・・・どうしたの？」
何だか彼がそわそわしてる。
「あーと・・・。今回の事もそうだけど、・・・最近妙に鉄砲玉なお前さんが危なっかしくて感じていての」
”はあ・・・そりゃ危ない事は何度かしてますけど・・・。反省もしていますよ？”
「あ、自覚はしてるのね。じゃなくてだな。そのー、何だ？放っとけないと言うかだな。そうだ！うん」
”・・・いきなり自己解決されても困るんだけど・・・”
困惑度、プラス１０。
「すいません。それは口実で、俺も寂しいんです！」
うぁ珍しい！彼が大声出したよ！
”逆ギレ！？確かにあちこち行ってばかりだったけど・・・”
「・・・ちょっとは俺の側にいてほしいんだよ」
頬をぽりぽりと掻きながら、彼はようやく本音を出した。
”あー・・・そゆこと。しばらく旅に出るの控えようか？”
「いやっ！それはしなくてもいい！」
・・・彼の言わんとしている事が、さっぱり理解できない。
「俺は旅をして、旅の事を話しているお前さんの顔が好きなんだ。で、付きあってそこそこ経つだろう？・・・だからさもっとそれを身近で見たいと言うか・・・一緒に同じ事や同じ景色を見たいと言

うか・・・だから」

その次の彼の言葉に
私は顔から火を吹いたのだった。

＊－＊－＊－

Ｌａｓｔ　ｐａｇｅ　～△月×日　日本某所にて～（後書き）

旅日記シリーズ最終話。最後までお読み頂き、誠にありがとうございました。

忘れかけていた約束を、彼の助力で「桜の木の下の青年」との思い出し、果たせた歩。
ちょっとだけ成長した青年と彼が友人同士になり、新たに友達が加わって、そして最後には・・・。
彼は生涯のパートナーとなりました。（現実でも、今山菜は結婚準備段階です）

私は友人作りが得意でもあって、また友人同士を引き合わせる仲介人めいたことをすることもあります。
お互い知らない人同士だけど、「山菜にはこんな友達がいるんだ」と知ってほしい、仲良くなれたら尚グッド。
　おせっかい焼きだと自覚もしていますが、仲良くなれたとき私はとても嬉しくなってしまいます。
こちらの物語を書いていた時、まさに友人関係で上記のような状態だったのと、最後の最後で歩が宣言していた「来年の今日、またここに来よう」という決意の結果を出すことができました。（日付は、Ｐ．０５と同じ日付になっています。丁度一年後と言う事で）

これをもちまして、旅日記は一旦終結とさせて頂きます。

完投した自分、お疲れ様。

ずっとお読み下さった方々、本当にありがとうございました。

でも、これだけじゃ終わりません。
どうやら歩の日記帳の欄外に、「メモがき」が残っているようです。

次回おまけ：～メモがき～

もうしばしの間、お付き合い下さい・・・。

おまけ：　～メモがき～

山菜（以下、山）「さてさて、私の本作品・旅日記日記シリーズが無事に完結いたしました」
ＢＧＭ：ぱちぱちぱち～

山「という訳で、あとがきのあとがきと言う事で、ちょっとネタばらしを含めて、歩さんとお話しようかと思います。ではどうぞ～」

？「えーと、すいません。歩の代理の『彼』こと優（まさる）です」

山「・・・は？」

優「大変申し上げにくいのですが・・・。これ」

山「エアメール・・・ってまさか！？」
がさがさ・・・

山「えーと。『やっほー優さん。今私カナダにいるの！メイプルシロップの工場を見学させてもらって、できたてをソーセージにかけて食べたみたの。やっぱり本場は違うね～』・・・だぁ？」

優「はい」

山「うがぁー！あいつはついに作者の手を離れおって！！」

優「内容が通っているようで、意味不明です。歩と約束をするなら、１週間前から約束を取り付けた上で、３日前には柱に縛り付けておかないとダメですよ」

山「だったらそうしておいて下さいよ！」

優「と言うより、自分の作ったキャラクターの主導権くらいしっかり握っておいて下さい」

山「はい。すいません」

＊作中の「歩」ってどんな人？

山「では早速。一度頂いた感想でもご指摘された事でもあります」

優「皆さん色々な解釈をしていらっしゃるようですね」

山「ええ。ある人曰く、私こと『山菜歩』の分身。あちこちに旅行に行って、訪れた先で見たものを物語としてまとめている作家。そして、旅行代理店の回し者」

優（笑）

山「商売っ気はないんですけどね（苦笑）

旅日記の「歩」は、指摘どおり「山菜歩」の分身です。

私は小さい頃から空想癖があり、また、実際（途中下車の旅的な）旅をするのも好きです。

世界中で見たいモノ、行きたい所がたくさんあります。

ここで空想癖全開。

「こんなことしたら楽しいだろうなぁ」「こういう経験をしてみた

いなぁ」という、「山菜歩」の空想を文章にしたものが、「旅日記シリーズ」なのです。
だから「作中の歩」は厳密に言えば作家さんではないのですよ＾＾
「厳密に」と言うのは、路銀を稼ぐために雑文を書いているくらいなものです」

＊歩の性格
山「『歩』の性格は、ほとんど『山菜歩』本人と変わりません」
優「でしょうね」
山「冷静かつ即答でしたね（苦笑）
改めて書くのであれば、鉄砲玉で快楽主義者。動いていないと落ち着かない。空想癖あり」
優（しみじみと頷く）
山「そして何より、文章を読むこと・書く事が大好き。
作った部分としては・・・
1：自称・開拓者
2：護身具系統の扱いが上手（実際は下手。自分が発射した防犯スプレーを被弾する程）
3：即断・即決・即行動ができる。
くらいなモノです」
優「あの・・・。防犯スプレーを被弾したって・・・？」

山「風向きの関係で、発射したガスがこちらに流れてきて・・・」

優「・・・何やってんですか？」

山「若気の至りと、寝起きの成せる技です」

＊旅の相棒の「大きな革のトランク」

山「さて、肝心の相棒。『大きな革のトランク』」

優「現実にも、山菜さんは旅行カバンとして使っていらっしゃるとか」

山「はい。『こういうモノの方が旅人っぽいでしょ？』という理由で選びました」

優「ほほう。形から入ったと」

山「ずっと憧れていましたしね。そして文中のトランクからは、四次元空間が存在しているのかと思われるくらいに、色々なモノが飛び出します」

優「・・・何が入ってるんですか？」

山「えーと・・・。

着替え、厚手のコート、薄手のパーカー、登山靴、サングラス、バンダナ、アメニティ各種、護身具系統、雨具、手帳、筆記用具、各国のみやげ物（幽霊番組のマリアのサインも含む）、旅のお守り（ペンダント）・・・」

優「すいません、もう結構です」

山「えー？あと野宿用品が入ってますよー。テントとか」

優「その収納技術は、ある意味アートですよ・・・」

＊登場人物

優「結構キャラが際立っている方が多いような気がするのでは・・・？」

山「旅日記問わず、私の作品は誰かしら友人をこっそりとモデルにしています」

優「あっけなくばれた事もあったようですね」

山「ええ。詳しい描写はしませんが、『はいサーセンw』って（笑）。あからさま過ぎたようです」

優「本当は気づいてほしかったんじゃなくって？」

山「断じて違います。逆にこちらからモデルになってほしいと依頼した方も・・・」

優「ＯＫ出たんですか？」

山「ええ！本当に小説作成の時、キャラ設定に困ったことがないん

ですよ。と言うより、優さんもモデルになっている人はいますよ」

優「はい！？」

＊世界観

山「不思議がられるひとつの要素です」

優「確かに。現代の話かと思ったら、妖精が出てきたり、過去の建造物が出てきたりって、不思議な感じがします」

山「そうですね。あえて言うなれば・・・。まず念頭において頂きたいのは、この物語は『ファンタジー』であると言う事。どんなことが起こってもおかしくない世界です」

優「現に他の小説のキャラクターも出てきたりしましたしね」

山「そうですね。そこでもうひとつの考え方。ＳＦ小説での手法・パラレルワールドに近い設定にしています」

優「と言いますと？」

山「『この世界にはいくつもの様々な世界があって、普段目に見えない、少し時間の位相がずれた世界がたくさんある』と言う事。端的に言っちゃえば、この世界はミルクレープみたいな作りになっていますよーって」

優「ふんふん」

山「その世界の一つ一つに、歩や他のキャラクターが『何らかの形』で存在しています」

優「なるほど。だから色々なキャラクターが乱入してきていると」

山「そうですね。アンジェラさん達なんかがいい例だと思います。それに妖精に誘惑される（回想・ヨーロッパ某所にて）わ、九龍城砦（中国某所にて）が出てくるわ・・・という事になっています。」

優「・・・さりげなく、時空を超えてますね」

山「だからジャンルは『ファンタジー』なんです。時空を飛び越えると言ったぶっ飛んだ設定も、ファンタジーだからこそ出来るものなのです」

＊今後は・・・？

山「何だか歩さんは落ち着いているようで、落ち着いていないような・・・」

優「落ち着いていたとしても、さて何日続くやら・・・」

山「・・・信用されてねぇなぁ・・・（苦笑）」

優「と言うより、山菜さん自身はどうするおつもりで？」

山「ちょっとプライベートで忙しいから、一旦落ち着くまで連載モノはお預けかな？単発ネタは書くつもりでいますが・・・」

優「さて何日続くやら・・・」

山「ここまでキャラクターに信用されない作者も珍しいよね」

＊＊＊

山「と言うわけで、『メモがき』いかがでしたでしょうか？」

優「『ここがわからない』、ツッコむぞという人がいたら、遠慮なくどうぞ」

山「取りあえず、おしまい！ばいば～い！」

優「では」

歩「ばいば～い！！」

山「ぬぉ！いつの間に帰ってきた！？」

おしまい。

おまけ：　～メモがき～（後書き）

長いようで短かった連載小説「旅日記」。
こちらでようやく完結いたします。

正直、書ききった長編小説はこの作品が初めてです。
この物語を書きながら、少しは文章書きとして勉強できたのではないかな？できたよね？？と言った気持ちです。
そして一番思い入れの深い作品となりました。

次回予告になりますが、また新しいお話を考えつつあります。
見切り発車しない程度に、新しいお話を提供していけたらと思います。

応援してくださった方々、コメントやアドバイスを下さった方々。
本当にありがとうございました。
そして、また山菜歩をよろしくお願いいたします。

これにて、「旅日記」、完結！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0819h/

旅日記

2010年11月3日01時50分発行